



心の糧

セオドア・M・バートン長老

現在,世界が必要としているものは,神のみところを知り, 権能と権威を持って神の御名により語り,「かくの如く主言 いたもう」と言うことのできる真実の予言者の指示である。

その日はすでに到来している。それは、人の知恵によって来たのではなく、ニューヨークに住む少年ジョセフ・スミスの素朴な祈りの答えとしてやって来た。彼はパルマイラの近くの森に入り、神に素朴な質問を発した。「どの教会が真実なのですか。」 この少年は、よもや慈悲と温情に満ちた新しい神権時代が始まろうとは、夢にも思っていなかった。当時地上には、ジョセフの質問に答えることのできる生ける予言者はいなかった。神御自身が答えるのでなければ、その質問に答える方法がなかったのである。

その素朴な祈りに答えて、御二方がジョセフ・スミスの前に現われたもうた。御一方が口を開き、他の御一方を指してジョセフに言われた。「こはわが愛子なり、彼に聞け」。(ジョセフ・スミス2:17)それは、復活し、今なお生ける神の御子イエス・キリストであった。イエスは、ジョセフに指示を与え、神に関する真の知識を伴った新しい神権時代を開かれたのである。またジョセフに、当時、イエスの御名によって語る権能を持つ教会は地上に存在しないと告げ、さらに、適当な準備と神権授与の後、ジョセフは今日連綿として世々連らなる予言者の最初の者となり、いにしえの予言者の如く、人類に指示を与え、祝福を与えることになろうと告げた。

神が生きたもうととを、またイエス・キリストが神の生ける御子であり、救い主であり、主であり、王であることを私は証する。イエス・キリストが、今なお生ける予言者を通じて、今の世の人々に語っておられると証する。メルケゼデク神権は、あらゆる権威と権能を備えて再び地上にあり、そして「かくの如く主言いたもう」と言うことのできる真の使徒と予言者が、今日も生きていることを証する。

私はこの証を、イエス・キリストの御名によって申し上げる。アーメン。

もくじ

心の	糧			セオド	ア・ N	1 · /	ニートン・	• • • • • •	•••
今月	の聖徒の	D道					• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	1	45
真の	教会…			・リグラ	ンド・	リチ	ャーズ・	1	46
偉大	なる信仰	第の人:	レーシー	・マッ	ク・フ	くミス			
				ジ	ャイブ	"ン・	ペイン・	. 15	50
イエ	スについ	ヽての証・	ブル	ース・	R·~	アッコ	ンキー・	15	58
救い	と昇栄・	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	·····	セオド	$r \cdot N$	1・バ	ートン・	16	60
永遠	の地平線	泉泉	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	ジョセ	フ・ア	ン ダ	ーソン・	16	62
ギノ	とよそ着	香マルコン	z	バナデ	ィン・	F. –	ティー・	16	35
ルツ		• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •		…メア	ŋ - ·	L·	ラスク・	16	38
小さ	なお友だ	ごちへ…	ジ	エーム	ズ・A	· 力	リモア・	17	70
与え	られてい	いるものる	を活用し	なさい					
				ロバー	ト・K	· ト	ーマス・	17	73
質疑	応答	•••••				· · · · · ·		17	74
無公	害に挑戦	はする水気	長エンジ	ン·······				17	78
祖母	は今も葬	対えてくれ	เธ	·····ベ	ス・C	· ポ	ーリン・	18	31
デビ	۲·0·	マッケィ	······ レ	オン・R	(•/\-	トシ	ョーン・	18	33

今月の表紙

今月の表紙は、祝福師ジョセフ・スミス・シニアの妻であり、予言者ジョセフ・スミス・ジュニアの母であるルーシー・マック・スミスの、45ないし50歳頃の姿を描いたものである。裏は、クモラの丘に行ったジョセフ・スミス・ジュニアの帰りを待つスミス家族。教会成人用機関誌(英語)「エンサイン」のデザイナー、ハワード・ポストの作。

聖徒の道 1973

末日聖徒イエス・キリスト教会東京ディストリビューション センター (106) 東京都港区南麻布 5 — 8 — 10

大管長会

ハロルド・B・リー N・エルドンタナー マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

スペンサー・W・キンボール ハワード・W・ハンター エズラ・タフト・ベンソン ゴードン・B・ヒンクレー マーク・E・ピーターセン トーマス・S・モンソン デルバート・L・ステイプレー ボイド・K・パッカー リグランド・リチャーズ マービン・J・アシュトン ヒュー・B・ブラウン ブルース・R・マッコンキー

諮問委員会

 $J \cdot h - vz \cdot 7r / rvz$ (内務伝達部長), ジョン・ $E \cdot n - (配送・翻訳部長)$, ドイル・ $L \cdot$ グリーン (教会誌編集主幹), ダニエル・ $H \cdot$ ラドロウ (教育資料担当主幹)

統一誌編集主幹

ラリー・ヒラー

日本語コーディネーター

八木沼修一

ローカル編集

高木まりゑ

聖徒の道4月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会 東京ディストリビューション・センター 東京都港区南麻布5-8-10 定価 年間予約 1,300円 1部 130円

今月の聖徒の道

今月は、1830年4月6日の末日聖徒イエス・キリスト教会 設立を記念する月である。6名の正会員により始められたこ の教会も全世界にわたる組織となり、その会員数は300万を 越えるまでになった。1960年から1972年までの12年間におけ る教会総会員数の増加は94パーセントで、合衆国以外の平均 をとると250パーセントの増加となる。

キリストの真の教会への背教とそれに続く回復と発展は、 新旧約聖書双方に予言されている。今月号の最初の記事は、 これらの予言の数々とその成就についてのリグランド・リチャーズ長老の説教である。

また今月号に「偉大な信仰の人:ルーシー・マックス・ミス」を掲載できることは喜びである。これは一個人を通して見た教会歴史とも言うべきもので、かの予言者の母である偉大な女性の物語として書かれている。回復の数多くのできごとが彼女の目を通して描かれ、また予言者ジョセフ・スミスの家庭生活についても触れている。

さらに、ブルース・ \mathbf{R} ・マッコンキー、セオドア・ \mathbf{M} ・バートン、ジョセフ・アンダーソン各長老の力強い説教も、読者の信仰を鼓舞するであろう。

「与えられているものを活用しなさい」と「無公害に挑戦する水素エンジン」はだれにも興味ある記事であるが、特に若い方々に喜ばれると思う。

真の教会

――大背教と回復に関する予言について――

ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は、「主の御業は勝利を得るであろう。地上のいかなる力をもってしても、真理が広まり、あらゆる国に福音が伝えられるのを妨げることはできない」と言われた。

スミス大管長は、さらに加えて「福 音は進み行き、やがて全地を満たすで あろう」と言われた。福音が進み行き、 全地を満たすとしたら、その全地に進 み」く業を助けるにあたって、家族と 共に私たち末日聖徒に課せられた責任 は何と大きいことであろうか。今日の 世界にあって、まだこの教会の会員で はない隣人や友人に、福音の回復を証 すること程、価値があると言われるメ ッセージはない。

古代の使徒ペテロの言葉を考えてみたい。彼は当時の聖徒たちに向かって こう語っている。

「……あなたがたは、選ばれた種族、 王国の神権者、聖なる国民、神につけ る民である。(なぜか?)それによっ て、暗やみから驚くべき栄光に招き入



十二使徒評議員会会員リグランド・リチャーズ

れて下さったかたのみわざを、あなたがたが語り伝えるためである。」(欽定訳 Iペテロ2:9)

本大会で私たちが受けてきた勧告は イエスが言われたように、光を人々の 前に輝かし、人々が私たちのよい行な いを見て、天にいます私たちの御父を あがめるようにしなさい、ということ である。(マタイ5:16参照)

パウロによれば「……信仰は聞くことによるのであり、聞くことはキリストの言葉から来るのである。」(ローマ10:17)

「しかし……宣べ伝える者がいなく

ては、どうして聞くことがあろうか。 つかわされなくては、どうして宣べ伝 えることがあろうか。」(p-v10:14—15)

それゆえ、教会員には、この神権時代に地上に真理を回復するにあたって 主がなされた御業を、全世界に向かっ て証する偉大な責任が課せられている のである。

イエスが、弟子たちから再降臨のしるしについて尋ねられたとき、戦争と 戦争のうわさがあり、疫病があり、地 震があり、ききんがあり、そして国が 国に敵対して立ち上がるであろうと教 えられたことを、あなた方は覚えてい るであろう。そのときさらにイエスは 言われた。

「そしてこの御国の福音は、すべての民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである。」(マタイ24:14)

イエスの言われた御国の福音を見い だすためには,人はどこに目を向けれ ばよいのであろうか。それは人の聖句 の解釈によるのではなく、イエスが十二使徒たちに与えられたような神から の力の宿るところにである。そのとき イエスはこのように言われた。

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んで接手聖任したのである。」(欽定訳ョハネ15:16)

「……そして, あなたが地上でつな ぐことは, 天でもつながれ……」(マ タイ16:19)

だれでも教会を組織し、聖句のある 箇所を抜き出して、それを教会の基礎 とすることができる。しかし、いかに して枯れ木から生きた枝を取ろうとい うのだろうか。主の御名によって行な う権威と権能を、どのようにして取り 入れようというのだろうか。

それは正式に任命されていなければ 市長や、知事、大統領の職務を代行で きないのと同じことである。また、天 父の王国においても、それを伝える権 利を持った人によって神からの権能が 与えられるのでなければ、いかなる仕 事もなしえないのである。

それゆえ、私たちは福音の回復の証し人としてことに立ち、キリストが生きておられ、天父が生きておられ、御二方が地上を訪れられたことを知っている、と全世界の人々に向かって証を述べるのである。予言者ジョセフのことを歌った歌にあるように、彼は、数ある教会のうちどの教会に加入すべらかと尋ね、どの教会にも加入してはいけない、彼らは人の戒めを教えとして教えているからであると言われたと宣

言した。

人々が少し心を開きさえすれば、どこで真理を見つけうるかさして困難なく知ることができるように私には思える。もちろん、私たちは真理の探究の際に、聖書をそのガイドとして使う。いつも私の印象に鮮かに残っているのは、オルソン・F・ホイットニー長老の経験である。彼は十二使徒評議員会の会員であり、ある大会の席上、この経験を述べられた。私は彼の言葉を読んでみたいと思う。

「しばらく前のこと, ローマカトリ ック教徒の学者がユタ州に来て, ソル トレーク・タバナクルで演説したこと があった。私は彼とだいぶ親しくなり 自由に率直に意見をとりかわした。そ の人は、たぶん12カ国語も話せるよう な学者で、神学、法律、文学、科学、 哲学などにも通じていた。ある日、彼 は私に次のように言った。『あなた方モ ルモンはある意味では無知な人です。 なぜなら, 今あなた方の占めている立 場がいかなるものか御存知ないからで す。全キリスト教会の中で存在する理 由があるのは、カトリック教会以外は あなた方モルモン教会だけなのです。 問題はカトリックとモルモンの間のこ とだけです。我々が正しければあなた 方がまちがっており、あなた方が真な らば我々は偽りです。問題はそれで終 わりです。プロテスタントは存在する 意味はありません。なぜなら,もし我 々がまちがっていれば、彼らは我々か ら分かれたのですから我々と同じよう にまちがっており,一方我々が正しけ。 れば、彼らはずっと前に我々から離れ .

去って背教したのですから真の教会と は言えません。もし我々がいつも主張 しているように、使徒ペテロから神の 力が(神権の鍵とも言えるもの)継承 されているなら、ジョセフ・スミスや モルモン教徒の必要性は認められませ ん。しかし我々がそのような力を持た ないならば、ジョセフ・スミスのよう な人が必要になり、モルモン教徒の存 在理由が明らかになる故に、要は福音 がキリストの時代から現代までの永い 間変えられないで続いてきたか、それ ともそれが変えられたために末の日に 新しく元通りに回復されねばならなか ったかという問題に落ち着くのです。」 (リグランド・リチャーズ著「奇しき みわざ」**P**. 2, 3)

一読して、しばし考えてみれば、再降臨の前に、すべての民に対して証をするために全世界に宣べ伝えられるであろうとイエスの言われた、その永遠の福音を見いだそうとする者は皆、今読んだこの話が正確に的を射ていると結論せざるを得ないであろう。

だれでも聖典を研究すれば、予言者たちの述べた初期の教会からの背教について知るであろう。黙示者ョハネがパトモス島に追放されたとき、主の天使が彼の前に現われて、告げた。「ここに上ってきなさい。そうしたら、これから後に起るべきことを、見せてあげよう。」(黙示4:1)

それからヨハネに、天上の戦いから 最後の場面に至るまでのあらゆるもの が示された。また、聖徒に戦いをいどむ ため、サタンに力が与えられる(聖徒 とはキリストの教会でキリストにつき 従う人たちであった)のが示された。 さらに天使は、すべての部族、民族、 国民を支配する力がサタンに与えられ たと告げた(黙示13:7参照)。では、 福音が聖ペテロの時代から現代まで、 ずっと続いてあるとしたら、なぜ聖書 にこのような言葉があるのだろうか。

パウロは当時の人々に絶えず警告を発して、まず背教のことが起こり、そして不法の者が現われるまでは、イエスの再降臨を追い求めてはならない。(『テサロニケ2:1-4参照)とさとしていた。他の予言者たちも同様に、国にききんが起こることを言明していた。予言者アモスは語っている。

「主なる神は言われる、『見よ、わたしがききんをこの国に送る日が来る。 それはパンのききんではない、水にかわくのでもない、主の言葉を聞くことのききんである。彼らは海から海へさまよい歩き、主の言葉を求めて、こなたかなたへはせまわる、しかしこれを得ないであろう。」(アモス8:11,12)なぜか。地上には見いだせないから

である。 もし福音が地上にずっと続いてある としたら、主の天使がヨハネの前に現 われて、サタンが聖徒たちに戦いをい どみ、すべての部族、民族、国民に打 ち勝つことを示したとき、天使は『た

だし、永遠の福音を保ち続けた者もいた』と例外をつけ加えなければならなかったであろう。これこそ、当時、真理が地上になかったことの証拠にほかならない。

聖典は,末日における回復の約束で 満ちている。私の好きな言葉は,ペン テコステの日の後,ペテロがキリスト を死に追いやった者たちに向かって語 った言葉である。

「だから,自分の罪をぬぐい去って いただくために,悔い改めて本心に立 ちかえりなさい。

それは、主のみ前から慰めの時がき て、あなたがたのためにあらかじめ定 めてあったキリストなるイエスを、神 がつかわして下さるためである。

このイエスは、神が聖なる預言者たちの口をとおして、昔から預言しておられた万物更新の時まで、天にとどめておかれねばならなかった。」(使徒3:19-21)

もしペテロが神の予言者であるなら 私たちも世の人々も、回復(改革では ない)の伴わないキリストの再降臨に は、期待を寄せることができないわけ である。家の改造と新築の間には大き な相違がある。私の知っている限りで は、私の携わった伝道活動の中で、世 の始まり以来のすべての聖なる予言者 たちの口を通して予言されていた、万 物更新を主張している教会はこの教会 以外地上には存在しない。

聖歌隊によって歌われたこの天父と 御子の訪れに引き続いて、モロナイの 訪れがあった。彼はキリストの時代よ り 400 年くだってこの地上に住んだ予 言者であり、またモルモン経翻訳の原 版を携えてきた予言者である。

イエスの証のゆえに首を打たれたバ プテスマのヨハネが、復活して戻って 来て、罪の赦しのために水に浸められ るバプテスマの権能を持つアロン神権 を、ジョセフ・スミスとオリバー・カ ウドリに授けた。また彼は、やがてメ ルケゼデク神権も回復され、その神権 は、聖霊の賜を授けるために按手礼を 施す権能を持っていると告げた。

主イエス・キリストの使徒であり、変貌の山で主と行動を共にした、ペテロ、ヤコブ、ヨハネが現われ、メルケゼデク神権を回復した。どれだけお金を積んだら、天父の子供たちにとって、これら一連のできごとほど意味を持つものを買うことができるであろうか。そして、私たちひとりびとりに、私たちの家族に、友に、そして愛する人々に、こうした聖なる天使たちの訪れのようなことが起こるであろうか。

しかも、これだけではない。その後、マラキの予言した予言者エライジャの訪れがあった。主の大いなる恐るべき日が来る前に、彼の訪れがなければ、主の降臨の折、全地が荒廃と化すであろう、と予言したあの予言者である。マラキの言葉を読もう。

「彼は父の心をその子供たちに向けさせ、子供たちの心をその父に向けさせる。これはわたしが来て、のろいをもって地を撃つことのないようにするためである。」(欽定訳マラキ4:6)

この聖句に主が御旨の奥義を示された、と使徒パウロが言ったときのパウロの言葉を理解する鍵がこの聖句にある。

「それは、時満ちたる神権時代に実現されるご計画にほかならない。それによって、神は天にあるもの地にあるものを、ことごとく、キリストにあって一つに帰せしめようとされたのである。」(欽定訳エペソ1:10)

私たちは時満ちたる神権時代に住んでおり、エライジャの訪れによって、その使命の鍵がもたらされた。ここに、私たちが聖なる神殿を建築する理由がある。そのために、私たちにはこの偉大な系図プログラムがあるのであり、同じ様なプログラムは、世界のどこを捜しても見いだせないのである。そして、その予言者たちは、この聖なる予言者の訪れを予見していたのである。

ョハネはパトモス島にいる間,聖徒たちに戦いをいどんで、彼らを足下に踏みにじるためにサタンに与えられた力だけを見たのではない。彼は「もうひとりの御使が中空を飛ぶのを見た。彼は地に住む者、すなわち、あらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音を」たずさえてきたのである。(黙示14:6)

もし福音が続いて存在していたとすれば、このできごとは必要なかったはずである。さらにヨハネは言った。「神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである……」(黙示14:7)そして、私たちの生きているのが、その神のさばきの日なのである。

さらにつけ加えて言った。「……天 と地と海と水の源とを造られたかたを 伏し拝め。」(黙示14:7)

ジョセフ・スミスが驚くべき示現を 受けたその時代には、天と地と海と水 の源とを造り、また人を御自分のかた ちにかたどって造られた神を拝んでい る教会は、地上には存在しなかった。 人々は、どこにでも存在する、ある 「霊的実在」を拝んでいたのである。 人々の描く神は、体なく、手足なく、感情もなく、果てしなく高い王座に座している、という神であり、それが人の筆による「無」というものの最上の説明だったのである。もし体がないとしたら、どうして話すのか。どうして聞くのか。どうして理解し、言葉を交わせるのであろうか。

モーセは、イスラエルの人々を約束の地に導いているとき、このことについて語った。モーセは、彼らがそこに長く留まることはなく、国々の間に散らされるであろう、と言った。そして続けて言った。「その所であなたがたは人が手で作った、見ることも、聞くことも、食べることも、かぐこともない木や石の神々に仕えるであろう。」(申命 4:28)

これこそ,ジョセフ・スミスが驚く べき示現を受けた当時,世の人々の礼 拝していた神なのである。

しかし, モーセの見たのはこれにと どまらなかった。彼は、末の日(私た ちの生きているのが、その末の日であ る) に、主の民が主を求めるならば、 確かに主を見いだす, ということを知 っていたのである(申命4:29参照) そして,ジョセフ・スミスは,ヤコブの 「あなたがたのうち知恵に不足してい る者があれば、その人は、とがめもせ ずに惜しみなくすべての人に与える神 に願い求めるがよい。そうすれば, 与 えられるであろう」(ヤコブ1:5)と いう訓戒に答えて,モーセの勧告のと おり、行って主を求めたのである。こ うして彼は、真実の生ける神を見いだ。 した。私たちはこのできごとに関し,

世界のあらゆる人々に対して述べる証を持っている。

私は使徒パウロがイエスと彼の十字 架にかけられたこと以外は知るまいと 決心したときに言った言葉を考えてみ たい。(Iコリント2:2参照)それ は、パウロが古代の予言者たちを知ら ず、その予言の書を読まなかった、と いう意味ではなく、新しい時代が来た ということなのである。

予言者たちの予言していた神の御子は、すでに来ておられた。更にパウロは語っている。「……わたしは、そうせずにはおられないからである。もし福音を述べ伝えないなら、わたしはわざわいである。」(I コリント9:16)

同じ意味で、私たちは、人の子御自身によってもたらされた福音の回復のこと以外は知るまい。そうすれば、この神権時代の予言者たちから離れることはないであろう。もし私たちがこの驚くべき真理を世の人々と分ち合わないなら、わざわいがあるように。

兄弟姉妹たちよ、私は、これが永遠の父なる神の御業であることを知っている。今日の世界で最も偉大な進展をしているのである。この世に住む正直な男女で、主を心から愛しながら、この教会に加入しようとしない者はいない。時間をかけて、この教会の何たるかを見いだし、永遠の父なる神に尋ねれば、神は決して誤って導くことはないであろう。

これこそ私があなた方に述べる証で ある。私はこの証を、主イエス・キリ ストの御名によって申し上げる。アー メン。

偉大な信仰の人

ルーシー・マック・スミス

ジェイナン・ペイン

頭上の雲の切れ目からまばゆいばかりの一条の光が射してかなたの緑の森をくっきり照らし出した。ルーシーは少年ジョセフがたった今話してくれた栄光に輝く、天父と御子の示現について思いめぐらしていた。

彼女の胸は喜びと期待にふくらんだ。というのもルーシーや夫ジョセフにとって、貴重な霊的経験は目新しいものではなかったからである。老いたルーシーは、父ソロモン・マックも祈りが答えられたと証していたことを思い浮かべた。愛する夫のジョセフは、幾度も霊的な、意味ある示現や夢を見る機会に恵まれていた。ルーシー自身も、夫が真理を見いだせるように森に入ってひざまずいて主に祈ったことがあり、美しい示現を見て心に平安を受けたのだった。また、27歳のときに肺病で死の寸前まで追いこまれたときには、いやしを求める信仰の祈りが応えられ、生きながらえて家族の世話ができるに違いないという確信を得たのだった。

これらの経験はみな、天父とイエス・キリストがルーシーの息子に現われることの、いわば序曲であった。ようやく彼女の霊的な願いが実現しようとしていた。彼女の全身全霊が「確かにこれは真実だ」と叫んでいた。

ルーシー・マック・スミスは節操堅い婦人であった。良いときにも悪いときにも家族に対する誠意は変わらなかった。この誠意は親兄弟に対する信頼と愛に、愛する夫に対する尊敬に、子供たち、特に少年ジョセフに対する暖かい信頼に現われていた。また立派な主婦、母親として自分にも忠実であった。思い出から消し去ることのできない家族の夕べに対する愛着、聖徒たちや隣人に尽くす熱心な奉仕、それにモルモン経に対して抱いていた強い証に現われていた。そしてこの誠意は永遠に家族が続くことへの信仰となって、子供たちが殉教に倒れたときも、棺の上にかがみ込んであの暗黒のただ中にくずおれながらも、ただひとつの慰めとなっていた。信

仰の篤い彼女は,「子供たちが愛で世に打ち勝ち」恵み深い 愛の御父のみもとに引きとられ,安息の中にあることを確認 した。

ルーシーの信仰はプリズムのように、人生のさまざまな角度から周囲に多彩な光を放った。マリヤと同じように「私の魂は主をあがめ、わたしの霊は救主なる神をたたえます」 (ルカ1:46-47)と叫んだ。

主は聡明で献身的な母リディア・ゲイツ・マックと正直で 勇敢な父ソロモン・マックの間に生まれたルーシーに,先祖 代々続いた永遠の家族に対する信仰を結実させようとされ

「ルーシー自身も、……森へ入ってひざまずいて主に祈ったことがあり……」



た。

ルーシーは1775年7月8日,アメリカの独立戦争のさなかに生まれた。幼い頃、父親からフランス人との戦争やインディアンとの戦争,独立戦争の武勇伝を聞くのが好きだった。ルーシーは父親がインディアンを待伏せしたり、傷ついた仲間を大胆にも救出した話をのちに年代記に記している。

彼女は父親から自由を愛する心と愛国心を受け継いだ。また指導力と決断力を与えられた。ソロモンはルーシーが9歳の頃から17歳になるまで商用やセールスの旅行で家を空けたが、それでも帰ってきたときは相変わらず貧乏だった。家族はこの世の物に乏しく、まわりを荒野に囲まれて子供たちは教育を受けられなかったが、リディア・ゲイツ・マックは子供たちに霊、文化的に豊かな環境を整えた。

リディアはソロモン・マックと結婚する前、裕福で文化的な家庭に育ち、教師をしていた。これは大きな祝福であった。ソロモンが不在のときには、子供たちの物的、知的、霊的要求を満たすという大きな責任が彼女にかかってきたからである。ルーシーは子供たちに学科を教えただけではなく、朝夕に子供たちを集めて祈り、お互いに愛しあうことや神を愛し敬うことも教えた。

ルーシーが抱いていた母親に対する愛や感謝は、スミス家がバーモント州からニューヨーク州パルマイラへ引越すことに決めた1816年のつらい別れの情景によく表われている。ルーシーはこう書いている。「今までに受けた教育のほとんど、それに宗教教育のすべてを授けてくれた信仰深い愛する母とついに別れなくてはならなかった。」 母親は生きて再び会えないという予感を感じたので、死後にもう一度いっしょになれるようこれからも信仰深く神に仕えてほしいとルーシーに言った。

ルーシーは母親の独立独歩と品格,そして豊かな言葉の賜を受け継いだ。彼女は物を書く時間がほとんどない開拓時代に、貴重な日記や書簡や伝記を書いている。彼女の記した「ジョセフ・スミスの生涯」は両親、兄弟姉妹、予言者や彼女自身の家族について記した伝記であるばかりか、ほこりをかぶった過去の諸文書中に輝く、機知と辛らつな味と霊性の混然一体となった珠玉の如き文学でもある。

ルーシーは8人兄弟の末子としてひときわかわいがられたが、それに毒されはしなかった。病身のふたりの姉ロビザとロビナを、ルーシーが13歳のときからふたりが亡くなった19

蔵のときまで快く看病するという経験があったからである。 20代後半の姉たちは当時衰弱病と呼ばれていた結核にかかっ ていた。

ルーシーに強烈な印象を与え多くの疑問を残した経験は、ロビザの奇跡的な回復とそれに続く衰退であった。ロビザは2年の闘病生活の末3日間危篤状態に陥ったが、午前2時にロビナを呼び、「主が私の心と体をいやしてくださった。起こして服を着せてちょうだい。起きたいわ」と言った。

ふたりの姉は1794年に相前後して亡くなり、ルーシーは暗く寂しく取り残された。当時の諸宗派の厳しい教義は、心に平安も慰めも与えなかったのである。彼女の霊は満たされなかった。絶望する彼女を見て、兄のスチーブンはバーモント州タンブリッジにある家にしばらくの間彼女を招いた。ルーシーはそれに応じ、新しい環境と新しい人々を喜んだ。そこで、彼女は背が高くおだやかな声のジョセフ・スミスという青年に会った。1年の交際ののち、ふたりは1796年1月24日タンブリッジで結婚した。

ルーシーは自分の結婚に送られる贈り物のことを聞いて、 驚きの目をみはった。兄スチーブンの商売仲間のジョン・マ ジェットはこう言った。「ルーシーにはちょっとしたものを 贈らなくちゃ。僕は君と同じだけの物を彼女に贈るよ。」

「よし, 私は現金5百ドルを贈るつもりだ。」 スチーブンは言った。

ジョンは「よろしい,では私も5百ドルを贈ろう」と言った。

我が家の支度金に1千ドルの持参金を贈られて、ルーシーは自分が愛され大切にされていることを身にしみて感じた。1千ドルは1796年当時、巨額な金であった。1ドルで1エーカーの土地が買える時代だったのである。結婚祝いは家族の大きな愛を表わすと同時に、これが莫大な購買力になることをも意味していた。強く男らしいジョセフはすでに農業で成功していたので、賢明なルーシーは持参金を将来のためにとっておいた。

ルーシーとジョセフはスチーブンとジョンに礼を述べ,ニューハンプシャー州ギルサムの近くに住む彼女の両親の所に 寄ってからタンブリッジに帰った。

ふたりは6年ほど農業を営んで豊かな暮らしをした。ルーシーは1798年にアルビンを,1800年にハイラムを生んだ。その後1802年にランドルフへ移り,商売を始めた。ルーシーが

27歳で、風邪をこじらせて数週間熱とせきに苦しみ、結核になったのはこの頃であった。医者たちはみな彼女が死ぬというので、ジョセフは悲しみに打ちのめされた。ルーシーは熱情という熱情を傾けて祈り、自分を生かしてくださるなら主のために働きますと神に誓約した。彼女はそのとき声を聞いた。「求めよ、さらば見いださん。たたけよ、さらば開かれん。心を慰めよ、神を信ぜよ、我を信ぜよ。」

ルーシーが物を言えるようになると母親はベッドにかがみ込んで娘を見たが、驚いて「ルーシー、お前はよくなっている!」と言った。「はい、お母さん。お母さんや夫や子供たちの慰めとなるように尽くしますと主に約束しましたが、その約束を守るなら、主は私を生かしてくださるでしょう。」4 ルーシーは言った。

このすばらしい経験に続いて、ルーシーは霊的な知識をさらに渇望した。しかし「命の言葉」を聞こうと幾つかの教会に行ってみても、落胆するだけであった。彼女の感想は予言的な響きを帯びている。

「……しかし私は彼(牧師)の話を聞いてから、帰る道々、彼は自分の話していることがわかってもいなければ理解してもいないと確信するに至った。今地上に私の求める宗教はないと私はひとりつぶやいた。それで、私はイエスと弟子たちを私の導き手として、聖書を研究しようと決め、人がつけ足したり削ったりできないものを神さまから得ようと努めることにした……聖書こそ私を命と救いへ導く道しるべにするべきだと思った。」5

いやしの力に対するルーシーの信仰を示すあとふたつの例は、特筆に値する。1813年ニューハンプシャー州レバノン一帯に発疹チフスが流行し、ルーシーの8人の子供が全員かかった。10歳のソフロニャは3カ月近くも重体で、医師たちからすでに見放されていた。ソフロニャの呼吸がまったく止まったとき、ルーシーは彼女をかかえてゆっくり部屋を歩きながら一心に祈った。その場にいた人たちはルーシーに、「無駄よ。気でも狂ったの。お嬢さんは死んだわ」と言った。しかし母の祈りはかなえられ、ソフロニャはあえぐようにひと息つくと、命を取り戻した。

ジョセフ(2代目)は、8歳のとき発疹チフスを足にわずらい3回も劇痛を伴う手術を受けなくてはならなかった。医師は切断することを望んだが、ルーシーは反対した。そこでジョセフを縛る紐が用意されたが彼は拒んだ。麻酔剤として

酒を飲むこともジョセフは拒否した。彼女はのちに, ジョセフがこう言ったと記している。

「『お母さん。どうか部屋を出て下さい。ぼくがひどく苦しむのを見ていられないでしょうから。お父さんは大丈夫です。でもお母さんは重いぼくを背負ったり、長い看病でくたくたに疲れています。』そしてジョセフは涙にあふれる目で私を見上げて言った。『ねえ、お母さん、出て行くと約束しますね。主が助けてくださるからぼくは大丈夫、頑張るからね。』……

3本目の骨が除去されたとき、私は夢中で部屋にかけ込んだ。するとああ……母の目に映ったのは何という光景だろうか。パックリあいた傷口、血がいまもどくどく流れ、ベッドは文字通り紅に染まっていた。ジョセフは死人のように青ざめ、玉の汗が顔をつたい、すべてがこの上ない苦しみを物語っていた。6

ジョセフは手術後, 急速に回復したが, その結果数年間は 片足がきかず, 生涯歩くときに少しびっこをひくようになっ た。

ルーシー・マック・スミスは主婦として女性としての自分に誠実であった。ルーシー特有の性質は、逆説的に見える要素を合わせて持っていた。衝動的であり決断力にすぐれた彼女は、しかし自分の言動を和らげ、権威を与えるみたまの勧めに頼った。パルマイラへ引越す途中、あるずるい御者が、彼女の馬や荷車、それに持物を盗もうとした。そのとき、彼女は大勢の旅行者たちを前に宿屋で、その御者と対決したのである。(夫のジョセフは数週間前にパルマイラへ向かっていた。)

「この場においでの皆さま、どうか少しの間、話をお聞きください。天に神のましますように確かに、この馬と品々は私の夫の物でございます。それですのに、この男はそれを盗もうとしております。……8人の子供を連れた私を、旅に必要なもの何ひとつ残さないで。」

彼女はそれからどろぼうに向かって言った。

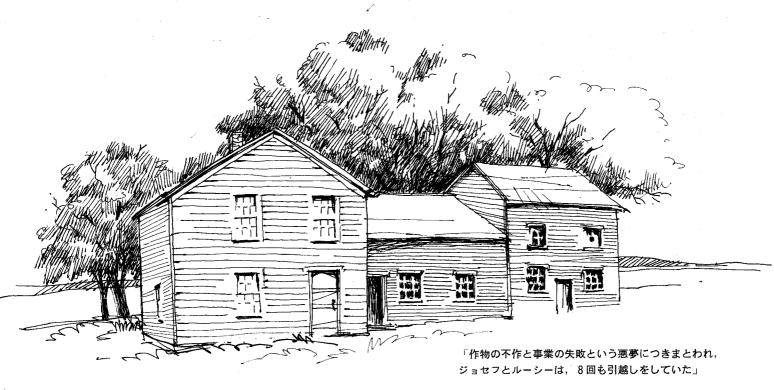
「私の馬に指一本触れても**承知**しませんよ。ひと足でも馬をひいてはなりません。さっさとどこへでも消えてしまいなさい。」⁷

ルーシーは不正にがまんがならなかった。母子が無事にパルマイラへ着いたときには、「わずかな現金2セント」を持つだけであった。

困窮した状態にあったにもかかわらず、自分や家族の能力に対するルーシーの信頼が、パルマイラでの1年目をすばらしい年にした。結婚以来、作物の不作と事業の失敗という悪夢につきまとわれ、ジョセフとルーシーは、ニューヨークへ来るまでに8回も引越しをしていた。ここパルマイラで、ふたりは購入した100エーカーのうち30エーカーの土地を整地し、丸木小屋を建てた。ルーシーは油布に絵を描いてお金を

場や家が無法者たちに巻きあげられてしまったからである。 ルーシーは小さい頃から宗教に関心を持ち、真理を熱心に 探究していた。ジョセフ・スミス(初代)が敵対心や不和を 感じとってどの教会に行くことにも失望してから、ルーシー は心が沈み、夫が真実の福音を見つけて受け入れるときがく るように祈った。彼女は美しい夢を見て、ジョセフが将来必

ず神の御子の汚れなく純粋な福音を聞いて受け入れるという



得、食料や家具を買った。

2年後、アルビンは両親が「もっとよい生活」ができるように住み心地のよい家を設計した。当時ルーシーは45歳で、わずか2歳のルーシーという赤ん坊がいた。彼女は新しい家が大そう気に入り、1823年11月にはほとんど完成したが、そのときアルビンは胃病を患い、未経験な医者の下剤の扱いがもとで死んだ。アルビンは死の床でハイラムに家の完成を頼み、ジョセフには信仰深くあって金版を手に入れるように、また子供たち全員に父母に親切にしなさいと遺言を残した。家族や隣人はこぞって彼の死をいたんだ。弱冠25歳のアルビンは皆に愛されていたのである。新しい家にルーシーが住んだのも短期間であった。というのは、スミス家の開拓した農

確信を得て安心した。ジョセフも数多くの興味深い示現や夢を見たがルーシーはそれを受け入れ、そこに大きな意味を見いだしていた。夫が神権を受けて末日の教会で最初の大祝福師となるずっと以前から、夫を家族の頭として敬っていた。

ルーシーとジョセフ・スミス (初代) の間の愛情は、苦難と迫害の激しい試練の中で精錬されて、高められていった。ジョセフが1840年9月14日、死の眠りについたとき、ルーシーの将来は「寂しく途方にくれて」見え、それ以上に恐ろしい不幸や深い悲しみはあり得ないと思われた。しかしさらにその後の4年間に4人の息子と4人の孫、ふたりの義理の娘を失ったのである。

彼女の信仰のプリズムで一番明るい面は母親の面であっ

た。ルーシーは子供たちひとりびとりに、聖書を愛すること、読むこと、神を敬い、祈ることを教え、信仰の芽を育んだ。彼女は11人の子供の9人を立派な成人に育てあげた。少年ジョセフが14歳のとき、栄光に輝く父なる神と御子イエス・キリストを見たと話したとき、ルーシーは心から信じた。長い間待っていた真の福音が、日一日とページをくるように回復されていくのを見たとき、彼女の魂は喜びに満ちあふれた。彼女は息子や家族に与えられた使命と達成した仕事に誇りを感じていた。

ルーシーは毎日家族を集めて、少年ジョセフが主からなすべきことを教えられ、サタンの誘惑から守られるように祈った。ジョセフがモロナイからついに金版を託され、回復の業の一端を任されるまでの成長を試された長い4年間、ルーシーはしんぼう強くジョセフを励ました。また息子のおかれた立場をよく理解していた。

アルビンは、皆が朝早く起きて日没前に農作業を終え、母のルーシーは夕食を早めに用意して、皆いっしょにジョセフの話を聞けるようにしようと提案した。家族は、神が救いの計画を完全に知らせてくださり、自分たちの人生を明るくしてくださることを喜んだ。

ルーシーはジョセフが翻訳している古代の民のことをもっと知りたいと切望した。そしてついにモルモン経を目にし、読んだときには、過去数年間の苦労や心配を振り返って、「諸天が私たちのために働き、天使が……私たちを見守っている」ように感じた。彼女は心から「私の魂は主をあがめ、私の霊は我救い主なる神を喜びたたえる」と言うことができた。

彼女はモルモン経を愛し、耳を傾けるすべての人にその真 実性を力強く証した。数百人の群衆の中からひとりの男が 「モルモン経は真実の書物なのか」と叫ぶと、彼女は決然と して答えた。

「モルモン経は神の力によって世に出,聖霊の賜により翻訳されました。天使長ミカエルのラッパのように声高く叫ぶことができるなら,私は国から国へ,海から海へこの真理を宣言したいと願っています。そしてそのこだまがあらゆる島々に響き渡り,アダムの全家族にひとり残らず弁明の余地を残さないようにしたいと思っています。神がこの末の日に再び人間に御姿を現わしたまい,その民を良き地に集める業に着手されたと私は証します。民が神の戒めに従うならば,そ

の地は彼らの受け継ぎとなるでしょう。……」⁸

思いやりと情の厚い女性ルーシーは、予言者や家族が捕えられ、迫害されるずっと以前から、祈りの中に彼らの加護を願っていた。彼女は直感的に、子供たちが彼女の祈りを一番必要としているときを知っていたようであった。

彼女の信仰の祈りは、他の多くの人々にも及んだ。彼女は パプテスマを受けた後、特に自分の家族に対して立派な宣教 師となった。彼女は親戚を訪ねたり手紙を書いたりして福音 を説いた。彼女の関心や手紙が実って、兄のソロモンが教会 に加入した。

彼女の祈りは、ジョセフに死者のための救いの業が啓示されたときにもかなえられた。彼女はアルビンが祝福されて代理のバプテスマと神殿の儀式を受けられると確信した。アルビンは1823年に天使モロナイが現われてから数週間して亡くなっていたのである。

ハイラムは1826年にジェルシャ・バーデンと結婚し、ジョセフは1827年1月18日にエマ・ヘイルと結婚した。ルーシーは義理の娘たちを愛する模範的な母であった。殉教によってふたりの婦人が未亡人となったあと、ルーシーはエマと住んだが、娘のエマは1856年に姑のルーシーが死ぬまで献身的に世話をした。ルーシーは孫たちを愛し、ジョセフとエマが4回も生まれたての子供を亡くしたときにはわがことのように嘆き悲しんだ。

ルーシーの家では、神を愛する人は皆歓待された。来客の 兄弟たちに幾晩もベッドを全部提供して、ルーシーと夫が床 に寝たこともあった。

オリバー・カウドリはルーシーを「お母さん」と呼び、ルーシーもオリバーを息子のように扱って、翻訳の仕事をする 彼を励まし、信頼した。彼女はまた、予言者や家族の信頼を裏切って悲しい問題を起こしたマーテン・ハリス を も 愛 した

ルーシーは愛らしくやさしい女性であったが、いざ必要となると火のような激しさでせっかんをした。主に捧げる献身 と正義感が彼女に権威者の風格を与えた。

彼女の指導力は1831年初春に試された。聖徒たちはパルマイラ周辺からカートランドに移住するように命じられたが、ルーシーの家族はほとんどが一足早く、1月に出発していたため、彼女がまだ幼い息子のウイリアムとドン・カーロスを補佐に80人の聖徒をウォータールー支部から移動させる責任

に選ばれた。

エリー運河を平底舟で下る旅は悪夢の5日間であった。大部分の聖徒は自分に必要な食物も持たず、女子供にとっては厳しい天候だったからである。バッファローに着いたとき、コールスビル支部の会員も何人かいて、カートランドへの船旅を望んでいたが浩は氷に閉じ込められ、聖徒たちは立往生していた。

コールスビルの兄弟たちがルーシーたちに、船や宿を捜せなくなるから末日聖徒であることを話してはならないと口止めしたとき、ルーシーは大胆に声を張りあげて言った。「私

は正々堂々と自分が何者であるかを話します。あなたがたが キリストを恥とするなら、繁栄することはとても できません。私たちはあなたがたより先にカートランドに着けるでしょう。見ていてください。」

これは予言となった。ルーシーは信仰と祈りによって、自 分のグループの船を確保できた。グループの愛する聖徒たち が船のデッキで待つ間口論したり、不平を言ったりしている と、ウイリアムが母の所にかけつけて言った。「お母さん、 あそこで騒動が起きています。行ってやめさせてください。」 ルーシーは背は高くなかったが、威厳を保ち、冷たく澄ん



だ青い瞳に炎を燃やして騒動の場に出向いた。彼女の声は権 威をもって響きわたった。

「兄弟姉妹、私たちは聖徒と称しています。この世のすべ てのものと引換えに、神に仕えるため、世俗と決別したと公 **言しています。そのほんの出発点にあるときに、キリストの** 大義を自分の愚かさや不正な行動によって物笑いの種とする のですか。あなたがたは神に信頼すると言明していながら、 どうしてそのようにつぶやいたり不平を言ったりするのです か。あなたがたはイスラエルの民よりも分別に欠けていま す。なぜなら、姉妹たちは揺り椅子にすわりたいとぐちをこ ぼし、力と確信に満ちた存在であって欲しいと期待する兄弟 たちは、旅が終わるまでにきっと飢え死にしてしまうに違い ないと言う始末なんですから。どうしたのですか。だれか不 足な人がいますか。自分で食物を用意しなかった人にも私の 子供たち同様に、毎日食物を用意してあげているではありま せんか。あなたがたの信仰はどこにいったのですか。神に対 する信頼はどこへ行きましたか。……兄弟姉妹たち、もしあ なたがた全員で、望みを天にかけ、氷がとけ、私たちが身動 きできるように祈るなら,主が生きてましますように確かに, そのとおりになるでしょう。」。

そのあと数分してルーシーの信仰は報われ、氷が裂けて彼らはエリー湖に船出できた。船は正に満載で、岩壁で見送る人たちは今にも沈むかと思った。実際彼らが新聞社にかけつけたため、モルモンの船が乗客もろとも沈没したというニュースが出たのである。フェアポートに着いたルーシーと聖徒たちは、自分たちの死を報道した新聞を読んで笑いあった。ルーシーの強い信仰は生涯に数多くのみたまの賜をもたらした。それは予言であり、証であり、いやしの信仰、霊の識別、知恵と知識の賜であった。彼女の予言は聖徒をも敵をも驚愕させた。ミシガン州ポンティアックのプロテスタントのある牧師は彼女に紹介されたとき、あざ笑いながら言った。「それではあなたが、モルモン経を訳したとか言っているあの間抜けで愚かなジョー・スミスのお母さんですか。」

彼女は彼の目をまっすぐにみつめて答えた。「確かに私は ジョセフ・スミスの母でございます。一体あなたはどうして 彼をそのように言うのですか。」

ラグルス師は言った,「彼はたかが『モルモン』の本一冊 で他の教会を全部圧倒しようとしているからですよ。」

「あなたはその本を読んだことがあります か。」 ルーシー

は問い返した。

「いいえ、注目する値うちもないですよ。」彼は答えた。

そこでルーシーは証して言った。「あの本には永遠の福音 が載っています。……あの本は聖霊の賜の力によってあなた の魂を救うために書かれたのです。」

彼は答えた。「ふん、ナンセンスだ。私の教会の人たちは そんなたわごとに惑わされません。彼らはそれほど愚かでは ありません。」

ルーシーは予言のみたまを強く感じて答えた。「そうですか。ラグルスさん、私の言葉を覚えていてください。神の生きてましますように必ず、これから3年のうちにあなたの教会の3分の1の人が私たちの教会に加わるでしょう。あなたが信じようと信じまいと、執事さえも改宗するでしょう。」10

それまで冷笑を浮かべていたラグルス師の表情が急に変わった。それも無理からぬことであった。それから2カ月の間にジョセフはルーシーの助言に従い、ジェレド・カーターを宣教師としてミシガン州に派遣した。ジェレドはその牧師の教会の70人を改宗させ、執事であるサミュエル・ベントも、1833年1月にバプテスマを受けて忠実な教会員となった。

ジョセフは1842年の暗い迫害時代に、母親に次のような賛辞を捧げた。「私の母も、すべての女性の中で最も気高くすばらしい女性のひとりである。願わくば神が母の命と私の命を長らえさせたもうて、共に自由を喜び自由の空気を胸に吸い、交わりを末長く楽しむことができるように。」¹¹

家族はルーシーの宝であった。そして彼女は、愛する夫が 死の床で捧げた予言的な彼女への賛辞に値する女性だったの である。

「母さん、母さんは自分が地上で一番立派な家族の母だということに気づいていないだろう。世は世のものを愛するが私たちを愛しはしない。私たちが世のものでないために、世の私たちを憎んでいる。そのためあらゆる悪意が私たちに注がれ、私たちの命をねらっている。わたしは子供を見るとき、彼らが主の御業を行なうように育てられてきたとは言え、この世に生きている限り苦労や難儀は避けられない。それでいて彼らを敵のただ中に残していくことは忍びがたいことである。」12

ジョセフ(初代)とドン・カーロスは激しい迫害にあったのち、それぞれ1840年、1841年に死亡した。そのときサミュエルは、ジョセフとハイラムを救いにカーセージへ向かう途

中暴徒に追跡された。長年危険に身をさらし、迫害に耐えてきたサミュエルにとって、美しく黒い馬の背で数時間もつらい逃避行を強いられることは負担であった。そしてちょうど1カ月後にこの世を去った。そして周知の通り、カーセージの悲劇が起こり、予言者とハイラムは暴徒に殺された。しかし自己憐憫や痛恨は彼女の性格が許すところではなく、神や永遠の家族に対する信仰が彼女に平安と慰めを与えた。

ブリガム・ヤング大管長が聖徒たちを西部へ導いていく直前,1845年10月のノーブーにおける大会の栄誉ある席で,ルーシー・スミスは教会幹部から短い話を頼まれた。

「彼女は、主に導かれてこれほど多くの会衆を前にして話せることを心から喜んでいると言って話を始めた。……集まった人々の中で彼女の家族を知っていた人は、群衆の数に比べればほんのわずかであった。彼女は7人の男子を含む11人の子供の母であり、神への畏れと愛の中で子供たちを育てた。この家族以上に従順な家族はほかになかった。彼女は親たちに、子供の行動に責任があると警告し、怠惰にならないようにするため書物や仕事を与えるよう助言した。またすべての人に愛と善と親切に満ちて、人前でできないようなことを決して隠れてしてはならないと勧告した。」

彼女が会衆に自分をイスラエルの中の母であると思うかどうか尋ねると、5千人が「はい」と答えた。彼女はその声を聞いて身も震える喜びに満たされ、ジョセフがモルモン経を受けてから18年間の家族の歴史や経験した困苦、試練、迫害などを話し始めた。息子たちが家から引きずり出され、凶弾にさらされ、無実のけん疑で何カ月も汚ない土牢に入れられたことを語ると、聴衆は感動の涙を流した。不正を正そうとする合法的なあらゆる努力が徒労に終わったとき、ジョセフはそれらを天の最高の法廷に託すと言った。ルーシーの言葉を聞いて心打たれない者はいなかった。「そのとき、彼がこれほど早く私たちのもとを去り、自分で主の前に控訴しにいくことになるとは思ってもみませんでした。この一件がちょうど今審理されているとは思いませんか。

私は、私がこの国のそこかしこを悩ましておられるように感じます。また、主はブリガム兄弟にこの民を導き出させようとしておられます。この町には、私の死んだ夫や子供たちが眠っています。しかし、生きているあとの子供たちは皆さまと共にまいります。(子供たちが皆行くことを願っています。)彼らは私を残しては行かないでしょう。しかし、旅路

の途上でもし私が死にあうならば、骨をことに持ち帰って夫や子供たちと共に埋めてください。」¹³

会衆とヤング大管長は、スミス家の母の望みを果たすと確約した。しかしルーシーは体が衰弱していたため、西部へ厳しい旅をすることは無理であった。彼女は1856年5月、ノーブーのマンション・ハウスで81歳の生涯を終えた。

ルーシー・マック・スミスの模範は現代の教会員にとってよい手本であり、霊感を与えるものである。ルーシー・マック・スミスは系図と神殿の仕事を通して先祖を敬い、子供たちに神への愛と崇敬を教えた。夫と神権を敬い、「決して忘れてはならない」家庭の夕べを守り行なった。親、主婦としての役割を大切にし、真理の福音の上に堅く立って困難や試練に耐えぬき、永遠の家族のためには持てるすべての物を捧げる信念を持っていた。そしてどこにあっても家族や隣人に神の真実をおごそかに証し、模範と教訓によって無垢の人間を永遠の御父と天の家族のもとに導いていく信仰を持っていたのである。

脚 注

- ルーシー・マック・スミス,「ジョセフ・スミスの生涯(英文)」P.11
- 2. 同上 P.32
- 3. 同上 P.34
- 4. 同上 P.34, 35
- 5. 同上 P.36
- 6. 同上 P.57, 58
- 7. 同上 P.63
- 8. 同上 P.204
- 9. 同上 P.203, 204
- 10. 同上 P.215, 216
- 11.「教会歴史記録(英文)」第5巻 P.26
- 12. 「ジョセフ・スミスの生涯(英文)」P.308, 309・
- 13. 「教会歴史記録」第27巻 P. 470, 471

ペイン姉妹はユタ州プロボ市シャロン西ステーキ部オークヒルズ第5ワード部で初等協会の教師をしており、BYU主催の教育週間で幅広く講演をしたことがある。主婦であり母親であるペイン姉妹は、1867~1868年度ミセス・アメリカ・コンテストで第2位になっている。

イエスについての証

生命と救いの源である、イエス・キリストについての証

私は、この席で何を話すように主が望んでおられるか、祈り求めた。そして、イエス・キリストが生ける神の御子であり、世の罪のために十字架にかかりたもうたことを証すべきであるとはっきり感じることができた。

私は、聖きみたまによって与えられた個人的な啓示により、イエスが主であり、福音を通じて確かに生命と不死不滅をもたらしたもうたことを知っている。またイエスがこの時代に完全な永遠の福音を回復し、それによってなたちは、いにしえの人々と共に永遠に主の御前で譲りを受ける者となれるようになった。これは普通「イエスについての証」と呼ばれるが、私はその証を持っている。

証は神のみたまによって与えられる。そのほかのものによって得ることはできない。そして、証を述べるときには、みたまの力によって述べなければならない。そこで私は、この時間その力に導かれ、主のみこころ、御旨、さらには主の御言葉を語れるように、切に願い祈っている。

私は自分自身と教会員のあなた方に また全世界の人々に証を述べたい。私 がみたまの力によって語るときに、私 の証があなた方の心にしみこみ、あな た方にとって永遠の生命に向かう踏み 台となるためには、あなた方も同じみ たまの力によって導かれなければなら ない。すなわち、心があなた方の内に 燃え、私の語る事柄が真実であること を知るように祈る。



十二使徒評議員会会員ブルース・R・マッコンキー

失礼ながら、今から始める話の導入 として、また証として私の書いた詩を 読ませていただきたい。

> 我キリストを信ず ブルース・R・マッコンキー

我キリストを信ず、そは我が王 真心もて我は歌わん 声張り上げ、よろこびもて 主を讃えん 我が声こぞりて主をほめ讃 う

我キリストを信ず、そは神の御子 主は来ませり、みたまこの 地におわさんため病めるを 癒し、死にたるを立たしめ たもう すばらしきかな御業、讃う べし主の御名を 我キリストを信ず、そはあがむべき御名 主は来ませり、聖マリヤの 息とて 地にて死すべき民の真中に

立ちて統べたまい罪の苦し

み救いたもう

我キリストを信ず、そは道を示したもう 主はもちたもう、神のすべてを のたまいき主は「我につき 従いて来たれ我が友よ、神 は共におわす」と

我はキリストを信ず、そは 我が主、我が神主によりて 我は恵みの上にあり 力をつくして我はあがめん 主は真理と光の源なれば

我はキリストを信ず、そは 我があがない主 サタンの手より我を解き放 ちたもう 我は生きん、よろこびと愛 もで 永遠なる天の宮居にて

我はキリストを信ず, そは いと高きに立ちたもう主に よりて我は得ん, こよなき 夢を 主の御声降りぬ, 我悲痛におののくとき 「汝得べし」と

我キリストを信ず、よし何 事か起こらんとも 主のみもとにぞ我は立たん かの大いなる日、主再び地 に降りたまい すべて人の子を統べたまわ んそのときに

救いの根源は天父なる神である。事 実、救いとは天父のようになることで あり、天父が持ちたもうものを継承し 所有し、受けることである。神を知る ためには、神が信じ、考えておられる ように信じ、考え、また経験しておら れることを経験しなければならない。

偉大な救いの計画は、私たちが進歩成長し、天父のごとくになるように、 天父によって立てられた。しかし救いと言えばキリストがその中心にくる。 そしてその計画によってこの地球が創造され、人が住むようになった。その結果、私たちはこの世に来て、他の方法では決して得られない数々の経験をすることができるのである。

この世に先立つ永遠の前世で私たちは御父と共に住んでいた。私たちは,天父が永遠のただ中にあって偉大な声を発せられたときにその場にいたのである。「私の息子となり,無窮永遠の贖いの犠牲を捧げ,永遠の計画の要件を完全に満たす者として,だれを送り出そうか。」私たちはその場に臨席していた。そして,オルソン・F・ホイットニー長老が詩にうたった情景を目にしたのである。

御力と恵みとに満ち 神のように立たれた 御顔の輝きは 真昼の光に優り 髪は太陽の泡 深山におりる霜よりも白かった 主が語られた――厳粛の中に皆注 目した

その静けさたるや何者にも優る 静けさであった

「父よ」さらさら流れるせせらぎ のように

明らかに、音楽のように聞こえた 純白の雪の頂より

谷川の流れ落ちるように 「父よ」あなたの子らを贖うため ひとりの人が死ななければなり ません

地はまだ形作られず 生命が満ちていませんが

人が生まれるため

大いなるミカエルは堕ちるでし ょう

そこであなたは救い主を選んで送 らなければなりません

われここにあり、われを遣わしたまえ、私は今与えられている もの以外に、何の報いも求めません

私は喜んで犠牲を捧げます 永えに栄光はあなたのものです ――ジョセフ・フィールディン グ・スミス「完成への道」

P. 37, 38

救いの源は主イエス・キリストにある。天使はベンジャミン王に次のように語っている。「過去現在未来を通じて、救いは身代りの贖罪をなしたもう全能の主なるキリストの血に由って与えられる……」(モーサヤ3:18)

あるときジョセフ・スミスは、「あなたの宗教の基本原則は何ですか」と問われた。すると彼はこのように答えた。「私たちの宗教の基本原則は、イエス・キリストに関する使徒と予言者たちの証にあります。つまり、イエストが亡くなって葬られ、3日目に再びよみがえって天に昇られたての他のことはすべて、それに付随するものにすぎません。」(教会歴史記録、第3巻、P.30)

すなわち、私たちに言わせれば、主の贖いの犠牲が万物の中心である。天 父なる神は私たちを創造された。そうでなければ、私たちは存在しなかったであろう。そして御子キリストが私たちを贖われた。この贖いがなければ、不死不滅も永遠の生命もあり得ない。

諸天が開かれ、神が再び声をかけられた。また神は世の人々を召して代弁者とし、世の人々に御旨とみこころを告げる使徒および予言者とされた。これはこの時代に起こった栄えあるできごとである。神が告げたもうたのは、イエス・キリストの回復された福音であり、この福音は主の御名を付けられた教会に与えられている。

私の声は証の声である。私はこの御業が真実であり、神聖な神の御業であることを証する。しかもこれは私の声のみではない。また荒野で呼ばわる唯一の声でもない。

私が述べている証は、1820年の春に御父と御子がこの最後の神権時代に永遠の真理を告げるために現われたもうて以来、信仰堅固な人々が繰り返して述べてきた証でもある。また私の述べている証は、この時代に神がジョと従うことによりあらゆる国民、血族国語の民および人々の中から贖われる。何億もの人々によってやがて述べられる証の先触れにすぎない。

この御業についてひとつの驚嘆すべ き事柄があるとすれば、それはこの御 業が真実であるということである。。 エス・キリストの福音に救いの力、せる 能、権威があり、また救いに至らにある。 神の権威が、この永遠の丘の頂にある。 ということである。この栄えあるされる。 ということである。この栄えあるされる が全地にあまねくゆきわたるれる宣教が 地の諸国の人々が、伝えられる宣教が 宣言する真理を信じる速さにかいい 宣言する。集合するであろうと神がで れたのはこの時代のことである。「な んじらはわが証人なり、われは神なり、 これ主のたまえるなり。」(イザャ43: 12-13)

神の王国のすべての長老, すなわち 聖なる神権を持つすべての人々は, 神 の御名によって語り, また証を述べ, 心を啓発する聖霊を受け, さらに救い の真理を宣言する権威を持つ。神がこ う言われたのはこの時代のことである。

私はこれらの真理を宣言し、また人々がこれらを信じ、従うように心から願っている。ニーファイに倣ってこう言いたい。私が全身を傾注していることは、人々がアブラハムの神、イサク

の神、ヤコブの神のみもとに来て救われるように説くことである。なぜならこの御業は真実であり、救いはキリストによって得られるからである。神が証してくださるので、真実に相違ない。イエス・キリストの御名によって申し上げる。アーメン。

救いと昇栄

復活、贖いおよび家族の永遠の結びつきに関する説教

数日前、ラジオを聞いていると、ある牧師が聴取者に向かって説教しているのが耳に入った。「キリストへの信仰を告白しなさい。そうすれば救われるでしょう。ただ、心の中にキリストを信じる気持を持ちなさい。そうすれば救ってくださるでしょう。」

それから、話の結びにエペソ第2章8節を引用した。「あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である。」

そして、最後に次のように勧めた。「これは、あなたにとって大きすぎる要求でしょうか。何千何万という人々が、キリストを救い主として受け入れることによって、永遠の平和と幸福を見いだしているのです。キリストに対する信仰を持って、私たちの仲間になってください。そうすれば、救われるでしょう。」

私がいぶかしく思うのは、一体どれだけの人が、このような教えによって 偽りの意味での保障に安んじているのか、ということである。宣教師として



十二使徒評議員会補助セオドア・M・バート

戸別訪問していたとき、私は文字通り、何百という人々が「もう救われているから、別にこれ以上イエス・キリストについて知りたいとは思いません」と言うのを聞いた。このことを考えてみて、慄然とするのは、そう言う彼らが間違ってはいないということである。その牧師の言ったことは真実であるが問題は、それが真理の全部を伝えてはいないということにある。

私は、部分的な真理がいかに害悪を 及ばすかを知っているがゆえに、この 問題には、私個人としても関心がある。 片寄った知識程危険なものはない。私たちが必要としているのは、もっと多くの真理、つまり限りない真理であり、それによって、ついには私たちはあらゆることを知るに至るのである。

人が「私は救われている」と言うと き,一体どんな意味で言っているのだ ろうか。一般的には、それは、彼らが 死から救われていることを意味してい る。この種の普遍的な救いは、神の恵 「みとしてすべての人々に与らえれる。 普遍的な救いは、福音の原則や律法に 忠実であるか否かを問わずに与えられ るが、それは単に死からの復活に過ぎ ないのである。この点で、 救いは、不 死不滅と同意語であり、 復活した人は この状態で永遠に生きるのである。復 活は、キリストへの信仰を告白しよう がしまいが、イエス・キリストの払わ れた犠牲によって、この世に生まれた すべての人々に与えられる。人は皆, 義人であろうと悪人であろうと、イエ ス・キリストを通じてこの不死不滅の 賜物を受けるのである。

パウロはこのことをコリントに住む ギリシャ人に説明している。 「しかし事実, キリストは眠っている者の初穂として, 死人の中からよみがえったのである。

それは、死がひとりの人によってき たのだから、死人の復活もまた、ひと りの人によってこなければならない。

アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように、キリストにあってすべての人が生かされるのである」 (I コリント15:20—22)

このように、滅びの子を除く全人類は、普遍的な救いにあずかるのである。この復活に引き続いて、「而して、残れる者たちもまた生くべしといえども、彼らはまた再び自らの場所に帰り、その受くべかりしものを進んで受けざりしにより自ら進んで受くるところのものを受くべし。」(教義と聖約88:32)

これら滅びの子たちは(ごく少数であろうが)、復活することはするが、まだ汚れた状態にいるため、サタンの力からは贖われないであろう。こういう人々についてアルマは言っている。

「……これらの人々はあたかも身代りによる罪の贖いがないと同じ様である。それは神の正義に照らして贖われることもできず、またもう朽ちることがないから死に失せることもできないからである。」(アルマ12:18)

体を持ちながら、それで何もすることができないなどということは、私にとってほんとうの地獄のように思える。それ以外の人々は皆、神の恵みにより、死、地獄、悪魔、そして永劫の苦悩から救われるのである。

キリストの払われた犠牲の真の価値は、万人に与えられるこの普遍的な救い以上の意味がある。神がその子供たちのために計画された、もうひとつの救いがある。この救いは、個人の救いであって、それは恵みに基づくだけでなく、福音の律法への従順の度合もその条件となる。モルモン経の中である予言者は、なぜ彼とその同僚がそれ程までにイエス・キリストについて教えることに関心を払っているのか説明し

ている。彼の言葉によれば,

私にとっては、神と完全に一致する ことは、きわめて重大なことである。 私は契約の子であることを喜んでいる が、そのひとりとして、神のみもとに 連れ帰してくれるものこそ、個人の贖 罪と一致の概念なのである。この種の 条件つきの救いは昇栄と呼ばれる。

昇栄は、神の律法への従順の度合に 応じて、神の賜物として与えられる。

自分自身の力だけではどのように努めようとも、これに到達することはできない。ただ神の恵みによってのみ、この道は私の前に開かれてきたのである。しかし、神の律法への従順によってのみ、天父の家族に属するひとりの意子として、天父の日の光栄の王国で譲りを求めることができるのである。罪のある状態で昇栄することはできれるの罪に打ち勝つまで励まなければならない。

予言者アミュレクが神について語ったとき、このことを明確に説明した。

「私はもう一度汝に言う。神の御子はその民を罪のあるままに救いたもうことはできない。私は神が誓約で言いたもうた言葉を否定することはできない。神は不潔な者は天の王国に住むことができないと誓言をなさった。それであるから、もしも天の王国に住むことができないならば、どうして救われることができるか。従って、あなたらは罪のあるままに救われることはできない。」(アルマ11:37)

さらにアミュレクはキリスト降臨の 理由について語っている。

「また神の御子はその民の罪を贖う ためにこの世に降臨し、その名を信ず るすべての者の罪とがを負いたもう。 このような人たちは永遠の生命を受け る者であって、そのほかには一人も救 いを与えられない。

従って、悪人は神の子による罪の贖いがなかったと同じような有様であって、ただ一つ死の縄目だけは解かれるのである。ごらん、あらゆる人は皆死から復活して神の御前に立ち、それぞれの行いに応じて裁判を受ける日がくる。」(アルマ11:40—41)

こうした行ないは、真の意味で信仰の発露として起こってくるものであるが、その中には、悔改め、バプテスマ聖霊を受けること、そして生涯の終りまで変わらず義しく生活することが含まれている。

私には、アイダホ州ボイスの近くに 住むロドニー・モイルといういとこが いる。彼はソルトレーク市に来ると、 決まって私の事務所にあいさつにそ る。私は彼の訪問を受けるのが好かる ある。というのは、彼がいつも何かあ しい金句を残していってくれるから だ。つい先日の訪問の折も、私にこう があって、それをこの世の向こうまで も持って行けるとしたら、何を持って 行きますか。」

私にはその答えは明白であった。 「自分の家族と愛する人たち」である。神の律法に従順であれば、私は彼らを連れて行けるのである。福音の律法に従順であることによってのみ、私と家族を結びつける高い段階の救いが得られるのである。

そうした永遠の家族関係が成立つことこそ、昇栄と永遠の生命という字句の意味するところなのである。この家族の永遠の結びつきは、それをかち得るに必要な代価を充分に支払えば、神の王国における受け継ぎとなるのである。しかし、同じ日の光栄の王国でもそのような高い段階の昇栄を得るに充分な従順さをもってその代価を支払わなかった人々は、不死不滅のみを受け神の家族という組織の中で永遠の生命にあずかることはできないのである。

すなわち, 真実の, また純粋な意味

での完全な敷いとは、昇栄および永遠の生命と同意語である。このイエス・キリストを通して永遠の父なる神のほんとうの家族の一員に迎えられることこそ、聖典の繰り返して説くところであり、この地上に生まれたあらゆる老若男女の目標とすべきものである。この完全な敷いは、永遠に続く家族の結びつきの中で、またそれを通してのみ得られるものである。

天使モロナイがジョセフ・スミスを 訪れて、この神権時代における福音の 回復に関する最初の指示を出したとき、 予言者マラキの言葉を、聖書に書かれ ているものとは少し変えて引用した。

「見よ,炉の如くに焼くる日来らん。すべてたかぶる者と悪を行なうものはわらの如くに燃えん。そは来る者たち彼らを焼けばなり。万群の主は言う。彼らを焼きつくして根も枝も残らざらしめん。」(ジョセフ・スミス2:37)

この聖句を理解するために,「根」は「先祖」,「枝」は「子孫」と解釈するとよい。それゆえ,神殿に入り,家族の結固めを受ける資格を持てるよう

に神の律法に従順でなければ、めとり 嫁ぎのない状態で、永遠に別離孤独に 生きることになるのである。私が思う には、この種の存在はほんとうに寂し い状態である。自分が愛し、また愛し てくれる家族の暖かい影響を受けずに 生活する状態を考えてみるとよい。

このように、その律法に完全には従順でなく、昇栄を受けるに値する代価を喜んで支払わなかった人々について神は言っている。「この故に、彼らこの世の外に去る時は、めとり嫁ぎすることなくして彼らは天に於て天使に任命せらる。而してこれらの天使は、彼らよりも遙かに高き光栄に適しき、また優れたる光栄、永久の効ある光栄に適しき者に奉仕すべき奉仕の僕なり。

これらの天使はわが律法を守らざりし故に、殖ゆることを得ずしてただ別離孤独にて最高の栄に進み得ることなく敷われたるまま永久に変らず。これを以て、彼らは神々にあらず永久に神の天使たるなり。」(教義と聖約132:16—17)

この理由があるために,主は再降臨 の前に予言者エライジャの手によって 神権をあらわすと約束されたのである。エライジャの使命は、先祖に与えられた約束を私たちの心に銘じさせ、私たちの心を先祖と子孫とに向けることである。もし私たちが永遠の家族の昇栄という目標に到達できなければ、キリストの再降臨のときに、私たちのこの地上における生涯は、完全に無に帰するであろう。

それゆえ、自分の家族に思いを向け 主にあって、いかにして自分とそして 愛する人々が受け継ぎを得ることがで きるか、考えてみるとよい。ロドニー の言葉で、もう一度尋ねてみよう。 「何かあなたに心からの望みがあって それをこの世の向こうまで持って行け るとしたら、何を持って行きますか」

神の祝福があって,賢明な選択ができるように。私は神が生きたまい,またその神権の権能がこの地上にあることを証する。その権能を通し,また契約の息子,娘として,その律法に完全に従順であって初めて,神の王国において昇栄にあずかることができるのである。このことをイエス・キリストの御名によって証する。アーメン。

永遠の地平線

信仰とは何か、信仰はなぜ主を知ることと結びつくのか

人や国民の持つ最大の資産は信仰である。この国を建国し、きわめてむずかしい時代にあっても国を繁栄に導いた人々は、ゆるぎない信仰の人であり勇気の人であった。また洞察力のある人であり、絶えず前向きに物事を見つめて、決して過去に捕われない人であった。これは正に真実である。

同じことが、主の霊感と啓示の下に この教会を設立し、またその後教会を 築き上げていった人々についても言え る。彼らもまた確固たる証とたゆまぬ 信仰の持主であった。また今築きあげ つつある人もそうである。

恐らく今日程,信仰が必要とされて いる時代はないであろう。とりわけ, 神が指導したもうということに対する 信仰である。一般に、末日聖徒イエス ・キリスト教会の会員は、神が指導し たもうことを信じている。今の世は神 に対する信仰を持ち、神が世を治めて おられるということを信じる必要があ る。この国の人々そして世界の人々は この国と世界を統治したもう神を信じ る必要がある。この神とは、イエス・ キリストである。

私たちの中には、船で大洋を航海した経験のある人がたくさんいるだろう。そのとき、どちらを向いても、見えるものは、水、水、水である。眼で見る限り、空は眼前に広くひろがり、遙かかなたで水と接している。太また水平線から昇り、夕方にはまた水平線が私たちの視力の限界が、一種の地平線となっていると言えないだろうか。

私たちの霊の地平線はどうであろうか。世の物を求めようとするこの世的な苦闘で限界を作ってはいないだろうか。肉の物を獲得するのに忙しく,限界を作ってはいないだろうか。私たちの地平線は,金に目の色を変える世と対抗し,世の物の獲得に奔走して限界を作ってはいないだろうか。それとも,来世で神や愛する者と永遠に住むという希望にまで視界が達しているであろうか。

私たちの地平線は、死を越え、今述べたような現世的な物事を越えて限りなく将来にまで広がっていなければならない。そして将来の地平線は、現在の状況から生まれる身近な地平線と混同してはならないのである。

私たちの人生哲学によれば、生命は 永遠である――この生命は、前世においても初めなく、来世においても終り がない。現世においても来世において も、幸福は私たちの今の世の行ないに かかっている。それゆえ、私たちは人 生でいつもよりすばらしいものを求め るべきである。永遠の生命に至る道は 主の改めに対する従順で踏み固めなけ ればなうない。

私たちはかつて霊の状態で天父のみ もとに住んでいた。そして、この地球 に来て死すべき体を受け、地上でもろ もろの経験をすることになった。これ はさらに偉大な経験をし、さらに大い なる祝福を受けるに値するかどうか立



十二使徒評議員会補助 ジョセフ・アンダーソン

証する機会であった。そして私たちは この機会が与えられたことを喜んだの である。

現世では、天父の御前にいることはできないが、神と交わることはでき、また必要とあらばその御声を聞くこともできる。聖霊が私たちに与えられ、祝福を受けるにふさわしく生活すれば聖霊は私たちの導き手となり、伴侶となり、忠告を与える者となるのである。

ある人々にとっては、永遠の存在者に対して信仰を持ったり、その御方がたり、その御方がたり、その御方がたちると信じたり、祈りを聞きそれに答えることができる。と信じが私たちの御方が私たちの知れない。それは、私たちが、霊と肉という二元の御が私たちを愛しておられ、また天が私たちを愛し私たちがそれを受ける祝んである。またその御がないではる祝福がけっるということもなかなか信じられないでいる。

私たちは今日、家にいてテレビやラジオで、我が国や、ヨーロッパ、アジア、南米、またアフリカで起こっていることを見聞できるし、またこの大会の模様も一部始終、著しく進歩した電

気技術によって各地にテレビ放送されている。しかし、以前、そのような時代が来るだろうと言った人は人々の嘲笑の的になったものである。

私たちは今日,人類が月面を歩くの を見,月と地球の間の広大な空間を越 えて送ってくるメッセージを聞き,電 送してきた写真を見ている。

これらのことは、信仰と努力と知性 によって実現できたのである。

私たちは、神と話すことができるだろうか。

私たちの祈りは、声をあげても秘かにても、天父のもとに届きうるのだろうか。神はそれに答える力を持っているのだろうか。

私たちはここに来る前, 霊界で, 視 覚によって生活していた。だがこの死 すべき状態にある現世では、信仰によ って歩んでいる。神のみたまは,私た ちが神の子供であり、神が私たちを愛 しておられることを,人の霊に証して いる。また地上の生活には目的が―― 偉大で力強い目的, 輝かしい目的があ ることを証している。神の与えられた 戒めを守ることにより,知識と理解力 が得られること, 敵対するものに打ち 勝つことにより経験が積み重ねられる こと, 主の定められた時に墓からよみ がえり, ふさわしく生活していたなら 最終的には主の御前に帰れるというこ とを証している。これこそ, 私たちが 常に見失ってはならない,視界のきく 地平線なのである。

モルモン経の予言者アルマは、彼の 時代のある人々について経験したこと を述べている。その人々とは、着物が 粗末であるために会堂から追い出され た人々で、この世の品物に乏しく、心 の謙遜な人々であった。彼らはアルマ の所へやって来て、自分たちの立場を 説明し、どうしたらよいでしょうかと 尋ねた。アルマは、信仰の原則を説明 し、神の御言葉をもって答えた。

信仰に関してアルマは「信仰とは完全に物事を知ることではない。それであるから、あなたたちにもし信仰があ

るときには、まだ見ていない本当のことを待ち望む」(アルマ書32:21)と 説明している。

アルマはさらに話を進めて,彼の言 葉――実に神の言葉でもあり、救いの 福音でもある言葉を、人が土に蒔く種 子になぞらえた。もし私たちが、心の 中にその種子を蒔く場所をとっておき 抜きとったり、主の「みたま」に逆ら ったりしなかったら、また真実の種子 であったら、それは胸の中でふくれ始 めるであろう。そして,種子がふくれ 始めることを感ずると, その種子が善 い種子であることを認めざるを得ない だろう。なぜなら、それは心を大きく 開き、理解力を増し、そして好い味を 感じさせるからであると説明した。さ らに,種子,言い換えれば御言葉,つ まり福音がふくれて芽を出し, 心の中 で成長し始めると, それが善い種子で あることがわかる。従って、その知識 は完全となる。するとそれはもはや信 仰ではなく,知識である。

福音が真実であることを確かめることなどできないという人もいる。しかし、アルマが言うように、神の御言葉を聞いたとき、それを不信心の心で抜きとったり、神の「みたま」に逆らったりすることがなければ、種子は胸の中でふくれ始め、心を大きく開き、理解力を増し、やがてそれが真理であることを知らせるだろう。

しかしながら、これはほんの始まりでしかない。種子を養い育てなければならない。言い換えれば、福音の教えに従って生活することによって、それが真実であるという証を養い育てなければならないのである。

もし、この古代の予言者の言ったことを皆やり遂げたなら、その種子は成長して木になり、実を結ぶであろう。しかし木を放っておけば、根はつかない。そして太陽が出てこれを照らし、焼きこがすならば、しおれて、枯れてしまうであろう。これは、種子つまり神の御言葉が真実でないためでもなく、結実したその実が悪いためでもない。

土地が荒地であって、木が養い育てて もらえなかったためである。そのよう にすれば、とれるはずの実もとること ができない。

しかし、信仰を持って、忍耐強く、 その御言葉あるいは木を養い育てるな らば、やがてその実をとることもでき る。それは最も貴重で、味のよい実で ある。

私は証したい。もしてれを皆行なうなら、すなわちイエス・キリストの福音にある神の御言葉のこの実験を実地に試み、戒めに従って生活するならば必ずや、この実を腹に満ちるまで食べる機会があるであろう。また信仰の報いを受け、信仰は成長して、イエス・キリストの福音が真理であるとの確固たる知識にまで到達するであろう。

必要とあらば、主の御声は末日の主の予言者たちの耳に届き、予言者たちも信仰を媒介としてそれを聞きとることができることを証する。また主のみころに一致し、永遠なる御方と交通することができれば、あなたがたや私でさえ、幕のかなたを見ることができると証する。

末日聖徒は、死すべき生涯の経験やその間に味わう諸問題、またその克服なくして、さらに復活体なくして、人の霊は完全な喜びを得ることができないと信じ、また教えている。私たちの人生哲学によれば、生命は永遠であり、前世においても初めなく、来世においても終りがないのである。

この世における幸福も、来たるべき 世における幸福も、この世での行ない にかかっている。天父の王国において 永遠の救いと昇栄を得たいと思うな ら、神の御言葉である鉄の棒にしっか りつかまり、主の戒めに従順に従って 歩まなければならない。

アイザック・ニュートン卿にこんな 話がある。彼が光の性質について深く 考えていたあるとき、窓のブラインド に穴をあけると、光線が部屋の中に入 って来た。彼が三角形のガラスを持ち 出して、光の所に差し出すと、虹の七 色が非常に美しく投映したのである。 そしてこのとき人類は始めて、宇宙の すべての種類の光線が、白色光線に集 約されていることを知ったのである。

もっと父なる神に、また天父の愛する御子に近づきたいと願うなら、福音のすべての原則に従って生活し、主の与えられたすべての戒めを守ることが肝要である。「宣教師の仕事はすばらしいですね。——大事なことだと思います。私は福祉計画や、若人のために行なっている教会のすばらしい社交計画に心酔しています。でもジョセフ・スミスが予言者であるとか、現在も予言者が主から啓示を受けて導かれているなんて、信じられません。」このように言うことはできない。

ある人は、こう言うかもしれない。 「モルモン経は受け入れることができます。でもジョセフが言うように、天 使から与えられたなんて信じられません。」

そのような浮き足立った信仰で、どうしてキリストの真実の光を受けたり、福音の真実の理解と光を得ようなどと期待できようか。どうして、主が忠実なる者に約束された祝福を受けようなどと期待できようか。もし、様々な原理のひとつでも取りこばしたら、純粋な白色光線は得られないである。同様にもし人が福音のあらゆる原則を受け入れず、それに一致した生活をしなければ、その心の中に福音の真実の光を招き入れることはできない。

ひとたび、神に対し真実の信仰を持ち、神の戒めを守れるならば、神に近づいていくだろう。また神も近づいて来てくださるであろう。そして信仰はやがて知識となり、地平線の限界は、永遠の世界にまで広がるにちがいないのである。

救い主の愛と祝福を受けながら信仰を成長させることができるように、主から与えられた戒めを守り、遂にはまた日の栄の王国で、救いと昇栄を得ることができるよう、イエス・キリストの御名によって祈っている。アーメン。





ギリシャの海には、たくさんの小さ な島があります。ギノは島の少年でし た。

ギノは山の頂上めざしてけわしい道 を登りながら、肩ごしに下をながめ、 よそ者のマルコス・ニカリスが出発し たときと同じように元気な足どりで歩 いているのを見て, あきれてしまいま した。

「休もうよ,マルコス。」

「でも、まだ村が見えるよ、まだそ んなに歩いていやしないよ。」マルコス は、エーゲ海の方まで続いている、マ ッチ箱のように小さな村の家なみをな がめて言いました。

「ぼくたちは、まだまだうんと歩か なきゃならないんだ」とギノは言いわ

けをしました。マルコスが肩の重い荷 物をおろすのを見て、ギノはいやな顔 をしてこう聞かずにはいられませんで

「君はなぜそんなにいろいろな道具 を持って来たんだい。ぼくは毛布と食 べ物しか持って来なかったのに。」

「山登りってものには, これが全部 必要なんだよ。」 マルコスは、がんと してゆずりませんでした。そして, ギ ノのおじいさんがかいてくれた地図を ひろげながら言いました。「ぼくたち は今どこにいるんだろう。」

「大体このへんだ。」 とギノは 指さ しながら, はき出すように 言いまし た。ギノは、マルコスの道案内をして 古代の神殿の遺跡がある所まで長い山 道を行くなんて、まっぴらだと思って いました。ところがおじいさんはどう しても行けと言います。

マルコスのおじいさんは昔での島に 住んでいて、ギノのおじいさんとは子 供の頃から友だちでした。しかしマル コスがこの島へ来たのは初めてでし た。マルコスは、おじいさんが何度も 話してくれた遺跡を前から見に行きた いと言っていました。

ギノがマルコスといっしょに行くの をいやがって, ぶつぶつ不平を言って いると、おじいさんは、「友だちのス テパノやコンスタンチンといっしょに 行くがいい」と言いました。



「あいつら行かないよ, マルコスが きらいなんだもの。」 ギノは言いまし た。

「きらいって……まだマルコスが来 てから,何日もたっていないじゃない か……。」おじいさんは,いぶかしそう に言いました。

「マルコスのやつは、アテネの家は 大きいとか、大きな自家用車があると か、ほらばかりふくんだ。あいつの話 は、イタリアやスイスやフランスの山 に登ったなんていう話ばかりなんだ。 あいつは、ぼくたちがいなか者で何も 知らないと思っているのさ。」ギノはマ ルコスがさもにくらしそうに、いやな 顔をしながら言いました。

おじいさんは、ギノの言葉が聞こえなかったような顔をして、こう言いました「マルコスのおじいさんとわしはよく山に登ったよ。楽しかったなあ、あの頃は。」

「だって, おじいちゃん, マルコス

ギノはおじいさんの言葉をさえぎって 言いました。

「ギノ,よそ者というのはどういう意味だね。」

「よそ者って、知らないやつで、知 りたくもない連中のことさ」ギノは肩 をすくめて言いました。

「そうか, しかしお前はその考えを 変えなくちゃなるまいな」おじいさん は言いました。

ギノは、自分のとはだいぶちがう、マルコスのがんじょうな登山ぐつやととのったみじたくに目をやりました。「おじいちゃんはまちがっている、マルコスはやっぱりよそ者さ」とギノは思いました。

「ギノ, なぜ君の友だちはぼくをさけるんだい」とマルコスはたずねました。ギノはおじいさんと話したことをいろいろ思い出していましたがわれてかえって,

「なぜそんなことを聞くんだい」ギノは急にぱっと立ちあがって、マルコスの言葉をかわしました。「さあ、行こう。ずいぶん長いこと休んじゃったな。」

マルコスは肩をすくめてついて来ました。昼ごろになると、ふたりはあたり一面岩で、絶壁のふちにあるせまい山道にさしかかりました。ギノたちはその道に入る手前のまだ少し広い道で休み、食事をしました。

「どうやらうまいぐあいに早く来られたね。日が暮れる前に、遺跡に着いてキャンプがはれそうだ」

「そうだね」マルコスはギノが手わたしたチーズ入りのパンをほおばりながら言いました。「ばく,肉とくだものを持って来たよ。」

「はあーん,その重そうな荷物は何かと思ったら,そんなものが入っていたのかい」ギノは言いました。

「うん, ほかにもあるんだ。」

「ああ, ああ, 君はベテラン登山家 だったっけね」ギノは, いやみたっぷ りに言いました。

「そうさ」マルコスはにやりと笑い ました。

「この, ほらふきっ」とギノは思わず言ってしまいました。

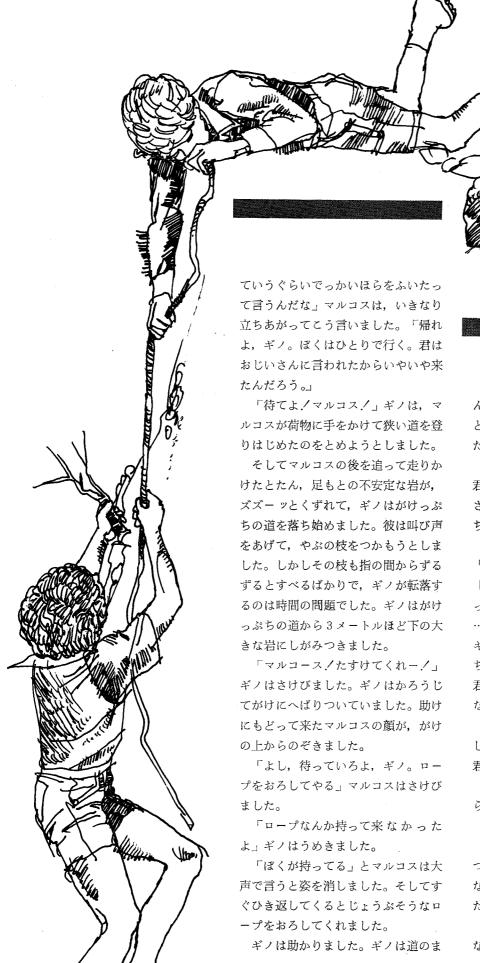
「ぼくがほらふ き だって。ち が う よ。ぼくが言ったことはみんなほんと うのことだ。」

「もういいよ。」

「もういいって? ふん, 君たちはどうなんだい。君たちだって水泳やダイビングのことで, さんざぼくに自慢したじゃないか。君たちだって, 町よりもここの方が楽しいって, さんざほらをふいて聞かせたじゃないか。」マルコスはカンカンになって言いました。

ギノも黒い目をむいて言いました。 「ぼくたちは, ほらなんかふいていな いっ。」

「ああ, そうだろうとも。それで君 たちは, ぼくがナメクジをクジラだっ



ん中にすわりこんで、心から「ありが とうマルコス。君はぼくの友だちなん だね」と言いました。

「ぼくはロープをおろしただけさ。 君だって同じことをしてくれたろう さ。」 マルコスは表情をかえて「友だ ちだって」と聞きました。

ギノはマルコスの肩に手をおいて、「君の顔が、がけっぷちに見えたとき『あ、こいつは友だちの顔だ』って思ったよ、信じてくれるかい。それから……まだ言いたいことがあるんだ。」ギノはにっこり笑いました。「ばくたちはたしかにほらをふいたよ。あれは君を意識してよく見せようとしたからなんだよ。」

マルコスは、はずかしそうに笑いました。「ぼくもそうだよ。ぼくは君や 君の友だちに注目されたかったんだ」 ギノは笑いました。「あした帰った

ら、おじいちゃんに言わなくちゃ。」

「何をだい,ギノ。」

「よそ者っていうのは、知らないや つで、知りたくもない連中のことじゃ なくて……」ギノは言葉をさがしまし た。

「そうだ!ほんとうは早く友だちになりたいと思っている人なんだ。」

ルツとしゅうとめのナオミは、とてもびんぼうになって、ベツレヘムへ帰ってきました。ベツレヘムでは、そろそろ大むぎのかりいれがはじまるころでした。そのころベツレヘムでは、まずしい人たちは、おひゃくしょうさんがこぼしたむぎのほやぶどうの。法律がありました。

ある日ルツがナオミに「はたけに, おちぼをひろいに行かせてください」というと, ナオミは行ってもよいといいました。

ルツがおちぼをひろっていると、そのはたけの主人のボアズがやってきて、おひさんだちに、「あのむすめさんだだね」とききました。おひゃくしょうさとめたちは、「あのむすめは、モアブからしゅうとめのナオミといっしょにやってきたのです。 大もむすとにちもなくしてしまったです。あのむすめは、朝早くから、少した。すまずにはたらいています」といいました。

それをきいてボアズはルツに「ほかのはたけには行かず、ずっとわたしのはたけではたらきなさい。のどがかわいたら、水もあげましょう」といいました。

ルツは、「なぜわたしのようなものに、しんせつにしてくださるのですか」とたずねました。するとボアズは「あなたが、しゅうとめのためにいっしょうけんめいはたらいているのを、よく知っています。 神さまのしゅくふくがありますように」といいました。

そしてボアズは、おひゃくしょうさんたちに、わざとむぎのほをこぼして、ルツにたくさんひろわせてやりなさい、といいました。





ぐみを、とてもかんしゃしました。

己たえ



ジェームス・A・カリモア長老 十二使徒評議員会補助



子どものころ, おとうさんか らとてもすばらしいお話を聞き ました。

おとうさんが伝道にでたころは、お金も持っていきませんでしたし、みじたくもかんたんなものでした。食べものやねるところ、それに着るものは、みんな神さまからいただけると信じなっていたのです。

そのとおり、おとうさんが伝 :: 道しているときは、食べものも たくさんありましたし、ねると ころにもこまりませんでした。 でもいちどだけ,きているもの があんまりみすぼらしくなった ので,かなしくなったことがありました。あまり歩いたの「トと した。あながあき、コいはあながあてしまれてしまれにシャツもよれにシャンもよれになった。 なり、おまけに木の下をだにっったときに、ぼうしてしまいましていましていました。 かけ、あなさんは、あたらいようにおいるようにおいる



りしました。

それからまもなくしてつぎの 町につくと、おとうさんあっの 手紙が3つうきていました。あ けてみると3つうともお金がに かっています。そこですようなになって、ひもんなでいようなんなちゅうらになるかっだがならられたおとうさんは、びぜれたおとりました。なぜたおとりました。なばないまりにはいっていたからです。

「あれは、おいのりがこたえられたんだよ。」 おとうさんはい つもそういっていました。

伝道をはじめて1年半ほどしたころ,おとうさんには,なやみごとがありました。お金がなくて,おかあさんのたんじょう日のおいわいになにも買ってあげられないということです。でも,それも神さまがたすけてもださいました。どうなったかをおとうさんから話してもらいましょう。

「おとうさんはね,いっしょう けんめいだんじきしておいのり したんだよ。そのころおとうさ んたちは,カンバランドの山な みのちょう上ちかく,人のあま りすんでいないところにいた。

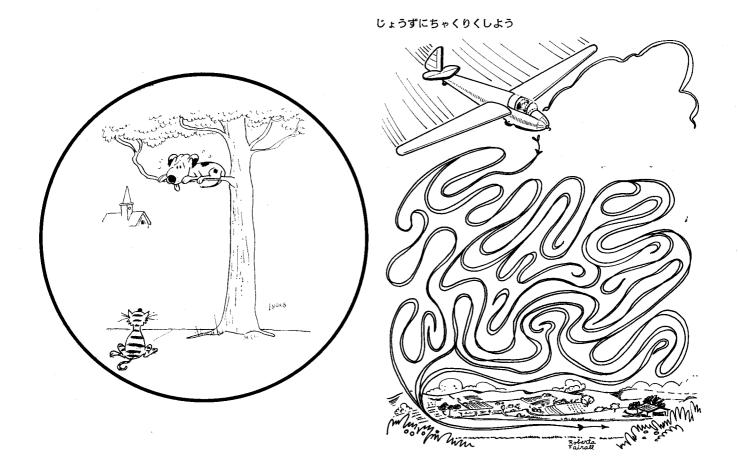
ある日,長いことだれもとおったことがないような道を歩い

ていたら、きれいなブローチが おちていたんだ。ひろってみる と、まだぜんぜんつかっていな いものらしい。『おいのりのこ たえですよ』おとうさんのどう りょうのせんきょうしはそうい った。

それからいく日かその近くの 家を一けん一けんたずねたんだ がだれもブローチのことをしら ないんだよ。それでおとうさん ははこにいれて、おかあさんに おくってやった。 おかあさんはもちろんびっく りしたよ。おとうさんにはそん なもの買えるわけないんだから ね。伝道がおわって家へかえり おいのりがこたえられた話をし たら、おかあさんはむねにつけ ていたそのブローチをはずして しまっちゃったんだ。なくすと たいへんだからってね。」

そのブローチはいまも家にあり、おとうさんが伝道したころのことをおもいださせてくれます。かぞくにとってもいちばんたいせつなものです。







与えられているものを活用しなさい

高校時代私は、ボクシングの世界へ ビー級チャンピオンになろうと決心し た。当時は不況で、それが私の知る限 り百万長者になるための唯一の手っ取 り早い道であった。私は図体のでかい 少年だったし、高校のアマチュの中だったし、高校のいた。ほんの2、 3年もすれば手に入るものが次々とこの中に浮かんで、私を誘惑くさん試会には出ていないし、おそらくは第一線 もっとも、まだそれ程たくくは第一線 は出ていないし、だれか熟練した人のコーチを受ける必要があることに、自分でもうすうす気づいていた。

やせてはいるが筋肉質でチビの男が 隣に越してきて、その顔を一目見たと き、私は求めている人がすぐ近くに来 たことを感じた。彼の引っ越しを手伝 いにかけ出していったが、私はいきな り彼に「あなたはボクシングの選手で すか」とたずねた。彼はにやっと笑っ て言った。「わかるかね、坊や。そう だ。プロの試合に7、80回ぐらい出た かな。」

「僕も選手なんです」と言うと、彼は私を眺めてから「うん、良い体格をしている」と言った。私は続けた。

「でも僕は、本格的な訓練はまだ何も受けていません。少しでいいですから教えてくださいませんか。僕は今まで出た試合には全部勝っています。」 ちょっとためらった後、「よし、オーケーだ。いつか私の車庫まで来なさい」と彼は答えた。

私は待たなかった。その日の午後出かけて行った。彼は私の熱心さにちょっとほほえみを浮かべたが、荷物の中から暫らくかかって、大きなスパーリング用のグラブを出してきた。彼の体重は120ポンドか125ポンドぐらい、私は190近くあった。シャツを脱いでから、「僕はあなたよりちょっと語いなから、「僕はあなたよりちょっと被めながら言った。「さて坊や、俺は勘で

打つんだ。考えてから打つなんて俺にはできない。すきがあったら遠慮なり打つからね。もし俺が必要以上に強な打つからると思っても、わざとやっているんじゃないことをわかってもらいたい。」「はい、わかりました。僕もはいで打つことにします。」私はそう言った。彼は私の顔を見上げたが、今度は笑わなかった。ただ「悪く思うなよ、坊や」とだけ言った。

後の話はみじめというほかない。私 は彼に触れることさえできなかった。 ――彼に触れることさえできなかった のだ。ほぼ1分後,自分で気づかない うちに大きなすきができたとたん、彼 のパンチが私のあごをとらえた。その 巨大なスパーリンググラブには鉄棒で も入っているかのように思われた。私 はもんどりうって倒れてしまった。ま だ完全にノックアウトされたわけでは なかったが、相当に目を回していた。 意識がもどってから見上げると、彼は グラブを外しているところだった。私 は飛び起きて言った。「もうやめるん ですか。アマチュアとプロの違いはわ かりました。でも, あなたに教えても らったら……」彼はグラブを外すのを やめず首を横に振るだけであった。百 万長者の夢はしぼみ始めた。私はなか ば混乱して彼にとりすがり、「どうか 教えてください」とたのんだが、彼は 私を振りはらった。

ちょうどそのとき、小さな金バエが 飛んできた。彼は手を伸ばしてそ、今 のかまえた。そして「さあ坊や、った。 のかまえた。つかむんだ」と言いれてを のの瞬間であったか、動きの鈍いるといい でれバエが近寄ってきたが、私ういれ を2度も取り逃がしたのだ。もでもれがれ を2度かまえらまでれるところまでれがよう。 ではできない。これからの かったが、坊や。君の反射神経でもよどう がってきない。これからなまい。こればからねえ、君。 ようもないことだからねえ、君。背が 高いほうだが、今までにバスケットボールをやる気になったことはないのかね。」

私はよろめくように家に帰った。全 世界がまわりで音をたてて崩れていく ようであった。私の母は人生の日も 気で寝ていた。実際それが彼りの母の の夏となった。私は自分がみじめ日となった。母の所に行っなぜ僕の反射神経なこった。とを聞かせた。「なけ経はないんだ」そのことを聞かせださったがあがられた。」 ないんだ」そのことで不必ずりしたようないんだ」そのは少しうんざりていた。母は当痛を感じていた。「もあずビー、お前に与えられているもので十分なんだよ。」

今まで母が私に言ったことで、「お 前に与えられているもので十分だ」という言葉ほど役に立ったのは、ほかに はあまりない。あなたが心弱く不不 リー・ジェイムズの有名な種類の人」 「何物も失わない種類の人」 である限り、あなたに与えられているもので十分だということを私は力にに 知のである必要はないし、不器用である必要はないし、不器用をいたりする必要もなたの持っている力を元手にして、積極的に前進できるのだ。

他愛ないテレビ番組を見ないで何冊も良書を読破するなどということは全く気の進まないおもしろくないことだと考えたりしてはいけない。あなたはそのとき、目ざす人生を生きているのだから。リチャード・L・エバンズ兄弟が好んで言っていたように「何かを実現したいと思うときには、もうすでにそれは始まっているのである。」

ロバート・K・トマス ユタ州プロボ この記事は、教会の教義を宣言するものではなく、読者に とって参考となり何らかの助けを与えるためのものである



「どんな人が、あなたの娘の理想的な夫になると思いますか。」



ステラ•H•オークラ プロボ市立学校 教育一般および成人教育指導主事

女性は大体若いモルモンの男性の中に、現実的な能力と永遠の観点から見た長所を見つけようとするものですが、その

観察眼に鋭さの差こそあれ、女性たち、中でも母親は、事実 上仲人役を果たしています。

私は、娘を誘いに立寄った人が、家族といっしょにくつろけるような人で、何時に帰宅するのかデートの予定を話してくれる人、また、やむをえない事情で遅くなるときには電話などでその旨知らせてくれるような人を望みます。要するに、人の気持を誠実に考慮するような人を望みます。

自分に自身を持ち、また男性であること―男らしさ―に自信があり、服装、外観がきちんとしている人、親切で優しく、暖か味があって、何事にも関心のある人を私は期待しています。このような特性がなくては、女性らしさを発揮することはできません。女性は、男性のかたわらにあって、助け手となるように創造されました。しかし、男性はまた愛によってこの献身を呼びさます必要があります。

私は、はなやかなロマンスにあこがれる少女の願いをかなえてくれる、「騎士」のような人を期待します。シェイクスピアはそのことを簡潔にこう言っています。「だれしも恋人を愛するものだ。」私は、人格を洗練するすばらしい芸術、つまり音楽や文学、ダンス、演劇などを好む人を求めます。

私は若いモルモンの男性に、完全な状態ではなく、可能性を求めます。可能性のある人が技能や能力を伸ばしていくのを見るのはうれしいことです。そのモルモンの若い男性は、 模範的な良い両親のもとに生まれ、その手本に従って育ったことでしょう。

神権を尊び、自分は神の息子であって、家族のかしらとなることができる、また永遠の家族の鎖の一環となるのだ、こういう信仰を培ってゆける人を私は望みます。安息日には、いるべき所にいて、霊的な事柄をよく受け入れ、霊的な業に人と快く携われるような人でなければなりません。

大志を抱き、卒先して事にあたり、つらい仕事も良く処理できる人、生活のかてを得る力も着実に伸ばしている人でなければなりません。聖典は男性の務めを明らかにしています。

「もしある人が、その親族を、ことに自分の家族をかえり みない場合には、その信仰を捨てたことになるのであって、 不信者以上にわるい。」(【テモテ5:8)

この競争の激しい社会にあって、生活力を身につけるには 勇気が求められます。若いときから責任感をもつようになる ことが必要です。テレビを見るばかりでろくに独創的なこと をしないで、それに甘んじている若い男性は、母親の庇護の もとで、とても自信を培うことなどはできないでしょう。

子供を愛し、主の道にそって子供を導く責任を喜んで引き 受ける人を私は求めます。どの母親もやがてはおばあさんに なることを考えるものです。 私が求める人は、よく祈る人で、「みたま」の導きとささ やきを信じて、将来に何の不安も抱くことのない人です。こ のような人は、みたまの勧めに従い、やがては証を述べ、地 域社会に雄々しく貢献することでしょう。

「どんな人が, あなたの息子の理想的な妻になると思いますか。」



ドウィット• J・ポール 祝福師 ニュージャージー州ショートヒルステーキ部

末日聖徒の親は、最近の性の乱れや、高い離婚率、家庭崩壊を真剣に見つめると、このような社会情勢が、自分の息子や娘の結婚にどのような影響を与えるか憂慮せざるを得ません。このような憂うべき状況下にあって、適切な伴侶を選ぶことは、今までになく大切なことです。

私には5人の息子がおります。もし社会の慣習が、息子の妻を選ぶ責任を父親に与えるのであれば、私は、誠実で活発な教会員を求めるでしょう。私が求めるこの人は誠実で活発な末日聖徒の家庭がどのようなものか、理解してくれるものと思います。将来義理の娘になるこの人は、恐らくこれから私が描こうとしている典型的な妻の姿からは距離があるかも知れません。しかし、誠実で活発な会員であるという背景があれば、典型的な妻になる至近距離にいるといえるでしょう。

もし、息子と妻が、お互いに多くのことに共通の関心をもち、共通の宗教的背景に加えて、教育の面でも社会的にも、経済的にも、大体同等の背景を持ち合わせているなら、順応性とか相性といった問題を軽減できるでしょう。大学で学位を取り、専門的な職業を身につけた女性も、望ましいことではありますが、それよりももっと大切なことは、絶えず成長し進歩してゆこうとする希望に燃えていることです。もし女

性がある種の才能や技能、例えば、音楽や他の芸術に秀でている、あるいは興味をもっていて、縫い物や料理の能力があるなら、それはよいことです。またもし、この花嫁候補が、お金の値打ちをわきまえていれば、なお結構なことです。

私は息子のために、快活で明朗な性格の人、暖か味のある 愛情に富んだ人、ふさわしいときにその愛情を示せるような 人を妻に選ぶでしょう。私はそんな人を、愛情に満ちあふれ た家庭から捜し求めるでしょう。その女性は理解に富む、親 切で、思慮深い人、さらに何にも増して、利己的でない人で あって欲しいです。知的で霊的な心の持ち主でもあって欲し いです。これといって問題がなく健康で、容姿も魅力的な人 が望ましいです。この後者の特質は、人それぞれによって違 います。必ずしも美人コンテストに出られるような人である 必要はありません。しかし、この花嫁候補は夫の目に快く映 る方がよいことは確かです。理想的には、女性は相手の男性 より少し若い方がよいでしょう。

最後に私は息子の妻として、第一に家庭を築いていく人であって欲しいのです。そのような人であれば、家事にしかめっつらをすることはないでしょう。母親であることは女性にとって最も重要なことで、第一の使命でなければなりません。ですから、この女性は子供を愛し、自分の家族を養育したいという強い望みを持っていなければなりません。以上のことに備えるには、充分に成熟している必要があります。それでこの女性の母親は、娘との密接なきずなを次第にゆるめ、根が独力で物事を考え、行なってゆくように配慮しなければいけません。

この素敵な恋人と私のむすこが、互いに熱烈に愛しあい、その愛がこの上なく美しいものであって、主の神殿で今も永世にもわたって結び固められたいと願う程のものであって欲しいと期待しています。私はふたりが若いときのロマンチックな愛の喜びを見失うことがないように望んでいます。しかし、またこのロマンチックな愛は成熟した夫婦のきずなに至るほんの始まりであって、主と共にふたりが協力して、不死不滅と永遠の生命を結実させる偉大な目的を成就していくのだということをはっきり理解するように望んでいます。

私はもちろんこの忠実なモルモンの少女が純潔であることを前提としています。正式に届け出て婚姻関係にはいる前に婚前交渉を持つことが望ましい実験であると大目にみられている昨今,私は取越し苦労をしているのでしょうか。私はそうは思いません。私が描いた理想的な伴侶にとって,そのような実験は必要ありません。この女性と息子は交際期間を持ち,婚約し,その結果健全な基盤の上に結婚することでしょう。またその間,お互いに正しい相手を選んでいるかどうかを見きわめるため,主に導きを求めることでしょう。

さて,以上いろいろと述べてきましたが,最後にもう一度

簡明直截に言うと、息子のために妻を選ぶとすれば、愛情豊かな、健康で知性ある立派な末日聖徒の少女を選ぶでしょう。しかし、もっと手短かに言えば、私は息子にこう言うでしょう。「お前の選択を尊重しよう。」

「聖霊を受けたことをどのようにして知ることができるでし



レオナード•J•アーリントン 教会歴史記録員

、今日の若者にとって根本的な問題は、自己の本体を明らかにすることにあると心理学者は言っています。確かに、若い人たちは、自分がだれであって何者なのかを追求する、自己認識の危機と呼ぶものを経過するものです。ところが今日、若い人たちは、急速な変化にさらされ、自分が非常な速さで作り変えられてゆくので、この自己認識追求はますます困難になってきているように思われます。

各人にとって最も大切なことは、仲間と、宇宙と、そして神との間に生きた関係を打ちたてるといった、基本的で重大なことなのです。この自己認識の過程は、宗教用語では、第二のパプテスマあるいは火によるパプテスマと呼んでいるものに一致し、同義に用いられることがあります。使徒ョハネは、救いを得るには、すべての人がふたつのパプテスマ、すなわち水によるパプテスマと、霊によるパプテスマを受けねばならないと記しています。(ヨハネ3:3-5)8歳のときに水によるパプテスマを受ける人が多いようですが、普通一両日後に按手確認の儀式を授け、聖霊を受けるように告げられます。しかし、大多数の人は、そのときになんら奇跡的な変化を感じることはありませんし、またそこで福音の真理に対してゆるぎない確信を得るほど成熟しているわけでもありません。

聖霊の臨在に気づいたり、福音の真実性に対して確固とし

た証を持つようになるのは,通常15歳から25歳にかけてです。 事実, 聖霊が宿る家庭で育った青年は, 生まれ落ちたときから聖霊の臨在を感じて育っています。ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は, そのような家庭に育ち, 聖霊を受けなかったときは思い出せないとさえ言っておられます。

一方マッケイ大管長は、若いとき、聖霊を求めて祈った結果、聖霊は務めを果たすときにいくたびとなく訪れたと語っておられます。ある人には、聖霊の臨在は、気づかないうちに忍び足でやってきて、やがて、真実を見抜ける意義深い瞬間を迎えたとき、自分が神の偉大な計画の一端を担っているのに気づくのです。そうして私たちは、自分がだれであり、なぜこの世にいて、どこへ行こうとしているのか、また何をしなければならないのか理解するのです。私たちは、神が生きておられることと、神が私たちを心にとめておられること、また私たちが神にとって喜ばしい者であることを確かめて自分が置かれている立場を知るのです。

このような自己の目覚めや自己発見の瞬間, また神が私た ちを心にとめて関心を抱いておられるのを知るときに、私た ちはしばしば涙を流し、時には霊感を受け高められて、雄弁 をふるい、詩を書き、また必ず価値ある目標を受けいれるよ うに励まされるのです。そのことを考えてみると、自己の確 立、あるいは、証の獲得、すなわち第二のバプテスマを受け ることは決定的なできごとなのです。それによって私たちは 教会や学校で、また自分が選んだ職場で幸福に活動するよう になるのです。パウロはダマスコスへ向かう道でそのような 経験をし、ジョセフ・スミスは、パルマイラの聖なる森で同 様の経験をしています。皆さんの中にも多くの人が、高校時 代の終り頃や大学時代の初めに、あるいは、伝道の最初の数 カ月の間にそのような経験をしたことでしょう。私自身につ いては、経済史で博士号を取るためにノースカロライナ大学 に籍をおきそこの図書館で読書をしている時にそのような経 験をしました。

霊のまことの訪れならば、その第二のバプテスマを受けたとき、ヒラマンが言っているように、私たちの「胸に火が満ちる」はずです。(ヒラマン5:45)そのとき私たちの霊はあたかも秘密の泉をおおっていた岩が急に取り除かれたかのように激しく吹き出してくるでしょう。

教会の過去の指導者が残した手紙や、日記、自叙伝には、この霊のバプテスマについて多くのことが記されています。そのひとつに、後に十二使徒になり、またさらに大管長になったロレンゾ・スノーが書いたものがあります。スノー長老は22歳で水に沈められ、バプテスマを受けた直後、聖霊を受けることを期待し、「この教が神からのものか」否かを知る(ヨハネ7:17)であろうという約束が果たされるのを待ち望みました。しかしこの確証はすぐには得られませんでし

た。スノー長老は自分が間違っているので、神が喜んでおら れないのではないかと心配し始めました。数週間後のこと, 聖典を学んでいる間、気分が沈んで元気がなくなりました。 スノー長老は家を出て外を歩き回っていると, 何かわからな いものに悩まされ、「名状しがたい暗雲」におおわれまし た。スノー長老は毎晩小さな森に行ってひそかに祈るのが習 慣になっていました。その日は特別で,スノー長老は非常に 落胆して「祈る気持になれなかった」のです。「天が頭上で 閉じられたように感じた」と書いています。それでもスノー 長老は祈るように自分をしむけたところ, まもなく頭上で 「絹の衣のような」音が聞こえてきました。「すると間もな く、神のみたまが降ってきて、私の体全体を完全に包み、頭 の先から足の底まで満たしてくださった。何という喜び、何 という幸わせ!知的霊的な暗黒から、光明と知識の世界へ解 き放たれた瞬時の変化をどんな言葉で言い表わしえよう。つ いで私は、神が生きてましますことと、イエス・キリストが 神の御子であることの知識を、また聖なる神権の回復、そし て全き福音についての完全な知識を得ることができた。それ は完全なバプテスマであった。天上における原則,あるいは 要素、すなわち聖霊による触知しうるバプテスマであった。 それは水によるバプテスマ以上に現実的であり、また感知し 得るもので、体のあらゆる部分に力の及ぶものであった。」

スノー長老は次のように結んでいます。「神はこの世が与 えるあらゆる富や名誉にまさる、大いに価値あるものを授け てくださった。」

私たちが愛唱している讃美歌を何曲か作曲し、後に扶助協会の会長になったロレンゾの姉、エライザも似たような経験をしています。

「1835年4月5日,私はモルモンの長老からバプテスマを受けました。そしてその夜,私は小川で水のバプテスマを受けたときに体がその感触を覚えたのと全く同じように、霊によるバプテスマを感じました。ベットに戻って、私の回りに起きたすばらしいできごとをいろいろと考えていると、言いようのない、強烈な感動がやってきて、……頭から始まって体中を包み、足の先から抜けていき、言い表わし得ない幸福を感じました。」²

教会の記録には、このような第二のバプテスマ、すなわち自己の確認、聖なる者の臨在の告示について数え切れないほど多くの話があります。このような祝福を受けた人は、その瞬間から神が生きておられ、福音が真実であることを、またこの教会が神の認めたもうた組織であって、また個人の昇栄に至る可能性が、その人の知恵と正義によって強化されることを確かに知るのです。もしある人がそのような確信を得るとすれば、その人は正しく聖霊の働きによってそれを得たのです。

- いかにしてモルモン教徒となりしか、ロレンゾ・スノーの日誌 より、「ジュブニール・インストラクター」22巻(1887年1月 15日) P. 22-23
- 2. エライザ・R・スノー著「不死不滅」(1957年) P.6

「非教会員を教会へ招待したとき, その人は聖餐をとっても いいものでしょうか。」



ジェームス•**E**•ファウスト 十二使徒評議員会補助

主はニーファイの民を訪れられたとき次のように教えられました。「信じてわが名によりてバプテスマを受けたるすべての者たちに」聖餐を与えよと仰せになられました。(Ⅱニーファイ18:5)そのわけは、主キリストの血が「わが名を信ずるすべての者のために」(霊感訳マタイ26:29)流されたものだからです。

従って聖餐は、基本的には、水にはいってバプテスマを受けたときに、主と交わした誓約を新たにするものなのです。 聖餐は、イエスの御名と教えを自分の身にひき受けた人々、 言いかえれば自分の生活をイエスの教えに従って正しいもの にしようと努めている人々にとって、更新を意味するものです。

聖餐はこのように、教会員にだけ意味のあるものですが、 聖餐をとるかとらないかは、個々人の良心にかかわることです。そこで、求道者や来賓が聖餐をとるのを禁じて、人々につまずきを与えることがないよう、常に注意を払う必要があります。多くの場合、来賓は、聖餐をとるということが、教会員であることを表わす印だということを理解しているようです。

····ハイキガ" マガ" クウキヨリモキレイ

無公害に挑戦する 水素エンジン

マーガレット・エリス

水や空気の汚染は,必ずしも世界のあら ゆる地域で重大問題となっていないにして も、その脅威はしだいに広がりつつある。 著名な探検家であるトール・ヘイエルダー ルは、大西洋のただ中においてさえ汚染を 発見した。(「聖徒の道」1972年9月号, P 398参照)。現在大気汚染の主因はガソリン エンジンと考えられている。そとで政府や 産業界は、排気物の少ない新型エンジンと 燃料の開発に何億円もの大金を投じてい

ブリガム・ヤング大学化学科出身のロジ ャー・ビリングズは自動車による大気汚染 に対する実用的で経済的な解決 法を 研究 し、すばらしい成果をあげてきた。そして

最近では,水素と空気を混ぜ,同時に水を 混合して燃焼させるという段階に至った。 彼はこれで汚染物質を全く排出しないエン ジンを完成したと考えている。

彼の発明でさらに驚くべきことは, エン ジンを循環してきた空気すなわち排気は、 吸い込まれる空気よりも一段ときれいにな って出てくるということである。ロジャー は水素で動く自動車の試作品として、マツ ダRX-2とフォルクスワーゲンの2台を 持っている。それは高校2年生のとき以来 の長年の研究と測定調査の結晶である。

「私は化学や物理学を、その成績を上げ るために勉強したことは全くありません。 水が電気分解で、どのように水素と酸素に

分解されるかを説明してある本を読みまし た。そしてまた、水素が空気中で燃えると 水にもどるということを知りました。そこ で私は水を分解して得られる水素をエンジ ンの中で燃焼させ, エンジンを駆動するの に使う。また水を分解するためには電気を 使い、その電気の発電エンジンにジェネレ - ターを連結してできると思うと、生物学 の教師に言いました。また, エンジンの排 気はこれを集め、圧縮して水に戻してしま う。私はこのようなサイクルを持つエンジ ンは永久に動き続けると思いました。しか し、当時の私は自動車についての知識も乏 しく、また「無から有は生じない」という 物理学の簡単な法則も知らず、ただいっし

ょうけんめいでした。さらにジェネレーターだけは必要な分のエネルギーを充分には 供給できないこと、従って外部からその分のエネルギーを得なければならないことを 忘れていました。」

ロジャーは化学を勉強し始めた。一方、 汚染問題は世界的に大きくなり、彼はます ます水素で動く車をつくることに関心を持 つようになった。しかし、この分野における ロジャーの努力はまだ実を結ばなかった。 そこで彼は他の研究課題を使って、数多く の科学展に参加し、知識を増し、賞を獲得 した。高校3年生のときには、水素エンジンの開発に多くの時間を費やすようになった。

ある晩のこと、もちろん数カ月の熱心な努力の後に、エンジンは動き始めたのである。わずか20秒間ではあるが、水素で駆動したのである。彼はそれを完成させ、その年の科学展で最優秀賞を獲得した。1966年には、水素で動く模型飛行機のエンジンをテキサス州ダラスで開催された国際科学展覧会に出品し、4位に入賞した。しかしその後ロジャーはブラジルに宣教師として召され、エンジンの開発は遅れた。エンジン



車会社に送りました。その後フォード社は その計画を援助することを決め、また結果 が有望であれば、将来補助金も考慮すると つけ加えました。

私たちは皆、主がすぐ身近におられるこ とを知っています。そして私たちはたびた び霊感を受けることができます。数多くの 経験の中からひとつ話しましょう。それは 私がたいへん学識のある機械工学者と話を したときのことです。彼はエンジンを水素 で駆動することは不可能であると断言し、 さらに不可能な理由を数々あげました。と ても、教養のある彼がそのように言ったこと で、私は自信をなくしてしまいました。そ こで私は家に帰り、そのことについて祈り ました。祈りの終わったとき、私は確かに 彼の言うことが間違っているのを知りまし た。水素エンジンには可能性があり、いつ か利用できるということを確信したのでし た。

私は実験で多くの失敗を繰り返しました。そして何度もやめてしまおうと思いました。しかしそのようなとき、いつも私は何かに促されてきました。それはまるで、私がこの仕事に召されているかのようでし

ニナル・・・・・・・



はまだ実用の段階ではなかったのである。

「ある日、戸別訪問をしていたとき、ひとりの男の人が応対に出てきました。そこで私たちは教会についてもっと知りたいと思いますかと尋ねました。しかし彼は、興味ありませんと答えました。少し話しているうちに、彼は私が科学に興味を持っていることを知り、また私の計画を聞いて、私たちを中に入れてくれました。

再び訪問したとき、彼はひとりの実業家といっしょでした。その実業家は水素エンジンの開発で私の仲間と私を援助することを申し出ました。彼の近所にはふたりのブラジルの国会議員がいました。彼らは私たちの計画を議会で紹介できるようにすでに

手はずを整えていました。このことにはたいへん興味をそそられましたが、私はそのとき、自分の責任が伝道であることをよく知っていました。そこで、福音をいっしょうけんめいに説きました。彼らは教会には入りませんでしたが、私は確かに彼らが聖霊を感じたと信じています。おそらくいつの日にか彼らは教会に入るでしょう。

伝道から帰って、再びエンジンをいじり 始めました。しかし今度は、働きながら学 校に通ったので、研究のための時間が非常 に少ししかありませんでした。まもなくブ リガム・ヤング大学の開発委員会が私の計 画に関心を持ち、私がしようと計画してい ることの原案を書き、それをフォード自動 た。私は主の力と助けなしには、決して成功しないと感じています。

もうひとつの経験は、ずっと以前にキャブレーターについて実験をしていたときのことです。私がよくガラスを吹いて、直径が約36~38cm、厚さ約3 mmの大きなフラスコを作りました。これはキャブレーターの部分でした。水素が充分に混和していないと気づいて以来、工夫を凝らし、フラスコの内部で水素と空気を完全に混合させてきました。これは時間をかけて充分に混和させ、それをエンジンに吸入するためでした。また小さな制御装置を備え、これをみて、フラスコ内での混合状態を正しく維持するようにしていました。これを芝刈機のエン

ジンに取り付けました。しかし私が芝刈機 を操作している間、だれかにこの混合制御 装置を見ていてもらわなければなりません でした。

私はこの役目に10歳の弟を使いました。 祈るべきだと感じたときには、私たちはひ ざまずいて祈りました。私はほとんどいつ も実験の前に祈りました。というのは、自 分が何をしているのかはっきりわからなか ったからです。祈りの中で、私たちが守ら れるように願い、また何をすべきか、そし て何をしてはいけないかを知るために霊感 を受けられるように求めました。祈り始め るとすぐに私はフラスコを包まなければな らないと強く感じました。そこで麻製で重 い、父のトレンチコートを持ち出して、チ ャックを締め、ボタンを掛けて、それでフ ラスコを包みました。エンジンを始動する や,バックファイアを起こし、火が水素と 空気の完全に混和したフラスコに入りまし た。その瞬間ものすごい爆発が起こり、コ ートはボロボロに裂けてしまいました。け れどもブラスコのすぐそばでひざまずいて いた私も弟も傷ひとつ負いませんでした。 私はこのように主の助けを数多く経験しま した。

末日聖徒の科学者は、他の科学者よりたいへん有利な立場にいると思います。それは動触な探究心と共に、霊感を受ける鍵を持っているからです。科学者が何かを発見するときはいつでも何らかの助けを受けています。なぜなら、主は正しい事柄を私たちに知らせようと望んでおられるからです。また科学者がふさわしい人で、いっしょうけんめいに働いてきたこと、あるいは主御自身の意図されるその他の理由から、それを発見する人になるようにと主が認められるからです。私たちは、いつも主を身近に感じ、福音に従って生活するならば、自然科学の分野において予言者あるいは啓示を受ける者になり得る理想的な立場にいるのです。

ロジャーは1972年5月にブリガム・ヤング大学を卒業し、マツダとフォルクスワーゲンを使って彼の発明を公開した。今日、道路を走っている単はほとんどどれでも水素エンジンに切り換えることが可能である。ガソリンの燃料タンク、パイプ、キャブレーターはエンジンに水を注入するのに使用できるからである。水と空気の混合物はシリンダーに吸入されるときに水素と混

ぜられる。ロジャーはエンジンとキャブレーターと内部のさびの問題については、いささかも心配していない。「結局、水はエンジンを循環して冷却作用を果たし、燃焼後水は圧力で外に排出されます。キャブレーターがさびることはないでしょう。燃料タンクとバイブの内壁にさび止めの特殊塗装を施す必要があるかもしれませんが、これはほとんど今日の自動車に一般に行なわれていることです。」

以上がロジャーによる水素エンジンの機構の説明である。水素が燃焼してできる生成物は純粋な水蒸気と窒素酸化物だけである。綿密な研究と技術のおかげで、ロジャーはエンジン内で窒素酸化物の濃度を1PPMまで減少させた、最良のガソリンエンジンでさえも40PPMである。さらにロジャーのエンジンに残っている1PPMの窒素酸化物は触媒変換器で除去される。

・「ガソリンエンジンの車から排出される 空気中の炭化水素や一酸化炭素はロジャー のエンジンに吸い込まれると、酸化され、 水や二酸化炭素になります。そのようにして実際にこれらの汚染物質は減ってゆくの です」と彼は説明する。

「水素はガソリンに充分匹敵する値段でつくられます」と彼は主張する。水素は原子炉の余剰エネルギーを使えば、1 m³当り1円位でできる。しかし、水素を工業的に製出するのに利用できる原子炉のエネルギーは十分ではない。他の方法では少々高くつくが、それでもガソリンに比べるとかなり安い。

燃料として水素を使うことの難点は輸送の安全性である。しかしてれに関してロジャーは、水素を高圧低温のもとでタンクに詰めて運ぶ必要はないと語っている。ニューヨークにあるブルックハーベン国立研究所では、金属の水素化合物として水素を貯えるタンクを公開した。そのタンクは必要に応じてガスを出し、また車が止まっているときは充分安全に保っておくことができるものである。

ロジャーは最近ウイリアム・リアと共に 仕事をしている。ウイリアムはリアジェット,8トラックステレオ,カーラジオ,飛 行機の自動操縦装置などの発明家として有 名である。彼らは今水素エンジンの完成を 急ぎ,蒸気車を走らせようとしている。

ロジャーは今の仕事と将来の計画につい て次のように語っている。「私の研究を支 えたのは、いつか非常に学識があり、影響力の強い人々に、今私が持っている福音が真実であるという力強い証を携えてゆくことができるような立場に立ちたいという強い気持です。

今までの研究でいくつかの重要なことを 学びました。その中で最も大切なことは、 高い目標を持ち、それが達成できると実際 に信じることです。私が水素エンジンを駆 動させることを目標にして、信じたように です。私はその分野では何の資格も教育も 受けていませんでした。私の考え方が間違 っていると思われたこともしばしばありま した。しかし私は自分の目標を定め、それ を達成するために必要な勉強をしたので す。私にはまだ達成できていない数多くの 目標がありますが、努力することによって 勝ち得た目標がかなりあります。それらは、 もし努力しなければとうてい勝ち得ること ができなかった目標ばかりです科学の分野 における私の最高の目標は将来利潤を追求 せずに、大気汚染を制御する研究を行なえ るような研究機関を設立することです。

私は多くの末日聖徒の科学者と接しているうちに、謙遜さについて学びました。最も価値ある業績を残していながら、彼らは何と謙遜で誠実なことでしょう。

最後に、私たちは自分自身を信じなければなりません。そしてひとたび目標を達成するや、過去をふり返って、なぜそれをしたのか、だれが支持してくれたかを考え、また主の助けなしには実際にそれほどのことは成しえなかったと認めるのです。」

ロジャーの水素エンジンを取り付けたフォルクスワーゲンは、最近ワシントンD・Cで開催された国際都市用自動車設計大会での無害の部で一位を獲得した。

彼の自動車は連邦標準よりはるかに勝って、750点中実に709点を取った。 2位に入 賞したロスアンゼルスのカリフォルニア大 学の自動車は546点であった。

その大会には2,000名に及ぶ学生が63の 大学から参加した。合衆国とカナダから出 展された車について、安全性、価格、操縦 性強度、および排気ガスの清浄度が審査さ れたのである。

水素注入キャブレーターがどのように噴霧状の混合物をつくり、それを機構に送るかを、学友に説明しているロジャー(写真はハル・ウイリアムズ氏の好意による)

祖母は 今も 教えてくれる

ベス・C・ポーリン





祖母はもっとあとになって教師の召しを受けていたかもしれない。でも日記をつけていた当時,正式な意味では教師ではなかった。けれども,私が今教えようとしているレッスシの題,「あなたは,自分のあるがままを教える」という言葉の深い意味を考えるとき,心に浮かんで来るのは,一度も会ったことのない,この祖母のことである。

家族の古い友だちから最近送られてきたスナップ写真では、祖母は楽しそうでおちゃめにさえ見える。それは、1904年、祖母が日記を書いてから5年後、家族といっしょに旅行をしたときのものである。流行のギブソン帽をかぶりふくらませた袖に、すそをひきずるスカートをはいている。写真の別の端には、少年の日の楽しみに胸ふくらませてほほえむ6歳の父がいる。

私の胸には、これとは対照的な祖母のおもかげがある。ひとつは、窓のそばでミシンの上にかがみこむ青白い陰気な少女の姿、もうひとつはゆらめくランプの光が後ろの壁に影を落として、テーブルに向かって書き物をしているうら若い女性の姿である。

祖母アリス・アメリア・チャンドラーは私が生まれる前に亡くなったので、祖母の家族といっしょのスナップやその他数枚の写真は、私にとって貴重である。でもそれ以上に大事な物は、私に祖母のおもかげを与えてくれる、2年間書き続けた彼女の日記である。

1897年のこと、アリスは結婚して数カ月で子供を身ごもっていた。私の父

である。祖母の夫ジョージ・アンダーソン・チャンドラーは、カリフォルニアへの伝道の召しを受けていた。日記の初めにはユタ州・オグデンの夫の出発の様子が書かれ、家族が彼女を元気づけてくれたことが書き加えられている。彼女は「思った通り私は元気だ。福音伝道にふさわしいと認められて召された夫を持つことに感謝しつつ、9時に床に就く」と記している。

彼女はけなげに明るく家事仕事や家族のために立ち働いた。しかしある晩宣教師資金獲得のパーティ券を売り歩いて家に帰り、パンをかき混ぜてからベッドに入ったが、その夜は眠れなかった。「ジョージのことが思われた。彼はどこに、何を考えているのか。寂しい。とても会いたい。」

寂しさのほかにもいろいろな問題があった。宣教師を支えるお金はどこから来たのだろうか。「道は開かれている。私は働いて少しだけれどお金が得られる。つい昨晩,私に何かすることが見つかるよう道を開いて下さいと天父に祈った。そしてきょう,洋服の注文がふたつ来た。何と感謝すべきことか。私は心から感謝をささげる。」

仕事や教会の責任に多くの時間をとられたが、「毎晩少しでも本を読もうと心がけている。今はメアリー・A・リバモアの生涯を勉強中……。」

心が沈むときもあった、「家に帰って、郵便配達人が来ていても私宛の手紙がなく、がっかりした……」また変化もあった、「10月21日(1897年)は大切な日だった。第3ワード部(オグ

祖母は 今も 教えてくれる デン)の青年女子相互発達協会が新し くなり、アリス・チャンドラーが副会 長になった。」

彼女は時々心配した,「夫は寝るべッドがあるだろうか,食べ物はあるだろうか。 ろうか。どこにどうしているのだろうか。終日彼のために祈り,彼を夢に見る。」

彼女の暮らし向きはいいものではなかったが、ほかに困っている人々がいた。「午後、貧しい人や病人を訪問した。」

「一日中針仕事」とだけ書かれたペ ージが多い。

仕事に追われながらも、彼女は共和党で熱心に働き、市民活動に関心を持った。「オペラハウスでの市民集会に行き、砂糖工場発足についての討論に参加した。集会の場でただちに1万ドルが集まった。」

夫から手紙が来たが、別れて最初の クリスマスには、「夫は貝がらを送っ てくれた。大きなのがふたつと小さな のがたくさん、ハンカチ3枚、手袋と 一番すてきなのはきれいなバラのつぼ みが5つ。」

アリスが夫に送った物は,「便箋を 入れる小さな箱とハンカチ。」

彼女は1898年 3 月 4 日の大きなでき ごとを、さりげなく記している。「午 後 1 時40分かわいい坊やが生まれた。 体重 9 ポンド。」

いつも勉強ということが、日記のテーマのように繰り返し出てくる。教会の集会や家族での旅行によってそれは 時々中断されたが、彼女は信仰に支え られて、寂しさや単純な生活を克服した。1898年の年を迎えて心新たにこう記している。「今筆をとっている。新年1898年の1時。遠くから、古い年を追い出して新しい年を迎える鐘の音が聞こえてくる。今年も去年のようにすばらしい年となるように。今記しているこのページのように、私の生活が終白なものとなるように。謙遜に祈りをもって生活し、神のみたまが私の中に住んで、毎日欠点に打ち勝つ力を与えてくださるように。私の光を輝かして、いつか私の名前が永遠の生命の書に記されるように……。」

この古い日記のページに記されたインクの跡は色あせ、黒く古びた表紙ははがれてめくれている。この日記を、同じ頃に他の親戚からもらった伝来の陶器と比べてみる。美しい皿をありがたく思い、年月を経ても少しの傷もないことに驚嘆を感じる。しかし、このつややかなきめ細かい面には贈り主のあとがみつからない。

私は謙遜な祖母アリスの残してくれ た生きた贈り物をとてもありがたいと 思う。名文でもないし、世に知られた ものでもない。しかしその日記を通し て、祖母の人格は私たちに教え続けて いる。上手なやりくりや忍耐、勇気、 そして信仰を。

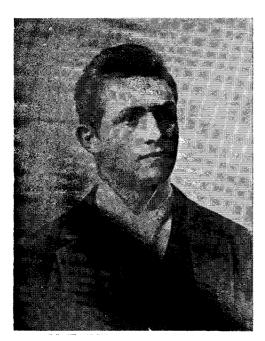
ポーリン姉妹は4児の母であり、トランスステーキ部(カリフォルニア)パロス・ベルデス・ワード部でステーキ部MIA主任教師として働いている。



デビド·〇·マッケイ

人の尊厳を重んじた予言者

レオン・R・ハートション



若かりし頃のデビド・O・マッケイ

今日の人々は、卓越した者、誠実な人になりたい、あるいは人として値うちのあることをしたいと心から望んでいる。デビド・O・マッケイも同様の決心をしていたが、同時に豊かな天性に意義と方向づけを与える、福音に対する愛も持ち合わせていた。

彼はユタ州ハンツビルの父親の農場で成長し、幼少の頃から、主とその仕事を生活の中で最優先に考えなければならないことを、両親の模範を見て学んでいた。8歳のとき、ふたりの姉が亡くなった。そしてその少し後、父親に2年間スコットランドの伝道に行くようにという召しがきた。マッケイ姉妹は出産を10日後に控えていた。また農場を運営し、幼い子供たちを養って

いかなければならなかった。それでも 教会が最優先に考えられた。それは信仰と献身の覚悟を試すこころみであった。出立の日、マッケイ長老は馬に乗ると、幼い息子を抱き上げ、別れのキスをして言った。「デビド、お母さんと家族の世話を頼むよ。」その日以来、デビド少年は並み並みならぬ責任感を 双肩に感じるようになったのである。

またマッケイ大管長は、若い頃にもうひとつ生き生きした教訓を学んだ。

「私は父に感謝しています。父は私 たち兄弟に干し草畑で教訓を与えてく れました。それは什分の一を品物で支 払っていたときのことです。私たちは 10台目の干し草を積もうとして、荷馬 車を押して畑の方へ行きました。9台

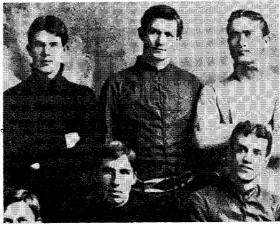
「汝、何者なりとも本分 をよく尽くせ」と、碑銘 の刻まれた石 (右)

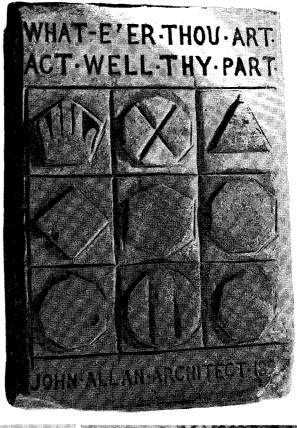
いつもりりしい顔立ち であった(下、右)













目の干し草を積んだ場所にさしかかり ました。そこには『おひしば』ともう 一種類の草が山積みされていました。 そこで、その草を積もうとすると、父 が叫びました。『そこじゃない。もっ と上の方に止めなさい。』そこには『お おあわがえり』と『ぬか草』がありま した。しかしひとりが(それは私でし た) 言葉を返しました。『同じ干し草 にしましょう。』

『いや,デビド。これは10番目のだ。

一番よいものを神様に捧げなければな らないのだよ。』

デビドは両親から充分に教えを受け た。しかし十代のとき、神の実在とそ の御業の真実性について自分なりの証 を得たいと思った。

「少年時代のある日, 私は牛をかり 立てていました。急勾配の丘を登る途 中、ちょっと止まって馬を休ませてい ました。するとまたしても,回復され た福音が真実であることを示現によっ



スコットランドで伝道中のマッケイ(上)

て知りたいという,強い望みが湧きあがってきたのです。そこで私は馬をおりて,手綱をその首になげかけ,ななかまどの茂みのところに行きました。そして,ジョセフ・スミスに啓示されたことが真実であることを私にも告げて下さるよう神に祈りました。私は,少年としては持てる限りの信仰をもって,熱烈に心から祈ったつもりでした。

祈り終えて立ち上がり、忠実な子馬の首に手綱をなげかけて、鞍にまたがりました。再び道を歩き始めたとき、私はこう独り言を言ったのを覚えています。『霊的な示現は何も現われなかった。正直のところ、祈る前の自分と全く同じ、「もとのままの自分」だ。』」

彼は大切な教訓を学んだ。若い末日 聖徒は、単に主に願うだけでは確信を 得られない。確信を得るには、働きと 奉仕、犠牲を伴って、神の戒めに従順 に従いながら願わなければならない。

彼は農場で働き続け、後にユタ大学へ通った。在学中、彼はフットボールをし、ダンスバンドのためにピアノを弾き、また4年生のときには級長るといれた。卒業が近づいて就職するとにした。しかし卒業証書を受けるとという召しの手紙をウィルフォード・ウッドラフ大管長から受け取った。これには大きな決心を要した。今日のことで悩んだ。しかし最後に、自分の計画を取りやめて、その召しを受けることにした。

召しを受けてスニットランドの地に 赴いたが、多くの宣歓託が現在も味わっていると同様に、最初の数カ月間は 容易ではなかった。彼はこの失意の期 間とその結果新たに主のために献身する気持を固めたときのことを次のように述べている。

「私はその当時ホームシックで、少し気力を失っていました。スコットランドのある婦人にちらしを渡したとき 『国に帰った方がいいよ。お前さんについて行く娘なんかいやしないから』 と言われました。

私はその国の女性には関心がありませんでした。故国に恋する人がいたからです。しかし人々がモルモンに対して示す悪意を思うと、私は勇気を失いました。彼らはその地における私たちの目的を何と誤解していたことでしょうか。

私は学校を出たばかりでした。私は 学校が好きでしたし、若い人々も好き でした。私は若い人々を愛していまし た。そして外国に渡り、反感と偏見に 触れて、私は気がふさぎました。

私は世界中で一番信頼できるピーター・G・ジョンストンという友といっしょでした。彼はアイダホ州の出身で経験の豊かな、資産家であり、また美をこよなく愛する人でした。彼を友に持ったことは幸せでした……。

町にもどる途中、右手の方に建築中のすまいが目にとまりました。その家の入口の石に、何か彫ってありました。それがとても珍しかったので、ジョンストン長老に言いました。『どんなものか見てくるよ。』砂利道を半分ほど上ったとき、石に刻まれた、次のようなすばらしい碑銘が私の目に入りました。『汝、何者なりとも、本分をよく尽くせ』

伝道を始める前に宿泊所を見つける ため町へ向かって歩きながら、私はジョンストン長老にその碑銘について話 しました。その後私たちは黙って歩い ていました。そのとき私は心中自分に

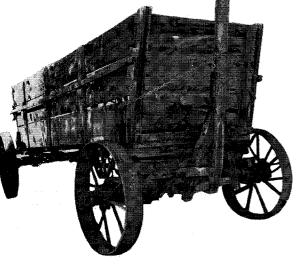
デビド・〇・マッケイと妻エマ



言いきかせました。それとも、私の内に宿るみたまが私に語ったのかもしれません。『あなたは末日聖徒イエス・キリスト教会の会員である。それだけにとどまらず、あなたは当地では主イエス・キリストの代表者である。教会の代表者となる責任を受けたのである。』

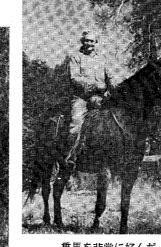
それから私は、その日の午前中にしたことを思い返してみました。私たちは 見物をし、歴史 について 学びました。それはほんとうです。私は感動を覚えました。というのは、大学で「湖

少年時代, 父の農場で使われ ていたこの荷馬車の中で, 大 切な教訓を学んだ



1900年頃,友人と共に撮影。黒のコ ートを着て後部の席に座っているの がデビド・O・マッケイ





畔の婦人」をちょうど学んだばかりだ ったからです。しかしそれは宣教師の する活動ではありませんでした。

その午後, 宿泊所を見つけましたが すでにそのときには、先ほどの石に刻 まれたメッセージを私に与えられたも のとして受けいれていました。そして その瞬間から,私たちはスコットラン ドで宣教師としての本分を尽くそうと 努めるようになったのです。」

彼はスコットランドでの伝道からも どり,大学時代の恋人と結婚した。 1901年1月のある寒い朝に、彼とエマ ・レイ・リッグスは、馬車でソルトレ - ク神殿に行き,主の御前で結婚の誓 約を交わしたのである。60年以上も後 に, ホテル・ユタに泊まったふたりが 新婚のカップルのようであると言われ たほど, お互いの間に交わした愛し敬 うという約束はよく守られていた。

「69年たってもハネムーンとして少し も遅くないですよ。特に、永遠に結ば れていようと思うときにはね」とふた りは口をそろえて語った。

彼はその後, ユタ州オグデンにある

ニューヨーク市で撮影(右)



教会経営のウィーバー・アカデミーの 講師になり、次いで学長になった。ま たステーキ部日曜学校管理会長になり 1906年、弱冠32歳で十二使徒評議員会 会員になった。彼は多くのすばらしい 能力を備え、日曜学校中央管理会長、 教会教育委員長、ヨーロッパ伝道部長 として精力的に働いた。また、61歳で ヒーバー・J・グラント大管長の副管 長に選ばれ、さらにジョージ・アルバ ート・スミス大管長のもとでも同じ職 を受けた。

1951年の4月大会で77歳のデビド・オーマン・マッケイは、テンプル・スケエアのタバナクルの説教台に立ち集まった人々に話をした。それはちょうど聖徒たちが全会一致で、デビド・O・マッケイを、予言者、聖見者、啓示を受ける者として支持した直後であった。

「兄弟姉妹,ならびに教会幹部の兄弟たち。神は私たちをひとつにしてくださり,互いに弱点を赦し,神の栄光と御業の発展を真心から仰ぎ見させて

くださいます。

さて、教会員の皆さん。私たちは皆 あなた方の助けと信仰と祈りを必要と しています。悪意ある批判ではなく, 助けを必要としているのです。たとえ 直接私たちと会うことができなくても 祈りによって助けていただくことがで きます。教会員全体の祈りの大切さを 昨日私は知りました。故郷の隣人から 手紙を受け取ったのです。その隣人は ちょうど納屋で牛の乳しぼりをしてい たときに, スミス大管長死去の報をラ ジオで聞きました。そのとき,彼は昔 の隣人にとってこれがどういう意味を もつかを感じ取り、納屋を出て家に帰 り、妻に知らせました。そしてすぐに 子供たちを呼び集めました。それから その家族は,各自の仕事を中断して, 質素な家の中で全員ひざまずいて祈り を捧げました。その祈りの価値を理解 していただきたいと思います。それを 10万の家庭, 20万, さらに50万の家庭 にまで及ぼしていただきたいと思いま す。また、一致と祈りの中にある力を

さらに教会員全体が支持するときの影響力に注意して下さい……」

マッケイ大管長は、それまでと同様に、大管長の任期中にも数々の顕著な業績を残した。大管長とマッケイ姉妹は、方々の国を訪れて、教会員にも明福をもたらした。また神殿の建築が多くの国々で始まり、伝道活動が盛んになって、会員数が著しく増加した。偉大な進歩の精神がすべての人を魅了したかのようである。またそれによってモルモンに好意を持つ人々が増加した。

そのような中にあって,教会員はマッケイ大管長の人々に対して抱く愛に 感銘を受けている。ある日,日曜学校 のクラスの子供たちが,事前に約束し て何キロも離れた所から大管長に会い





に来た。ところが大管長は、弟のトーマス・E・マッケイが危篤のために、ちょうど病院に馳けつけたところだった。次の日曜日、マッケイ大管長ははるばる出かけて行ってその子供たちの集う日曜学校の部屋をノックしたのである。教師がドアを開けると、そこにマッケイ大管長が立っていた。大管長はこのクラスの生徒に会って、出かけてくれた日に外出して申しわけなかったとわびるために来たのだった。

彼はその日事務所にいなかった理由を説明した後、教師や子供たちひとりびとりと握手して言った。「教会の大管長はできる限り必ず約束を守ることを皆さんに知っていただきたいと思います。」

マッケイ大管長のこのやさしい配慮 は,私たちが周囲のすべての人々に対 してどのように振舞うべきかを教えた すばらしい教訓のひとつである。スイ スとイギリスの神殿の敷地を奉献する ためにヨーロッパを訪れたとき,マッ ケイ大管長は, サインを求める熱心な イギリスの若者たちに取り囲まれた。 9歳位の女の子が一番前にいた。彼女 は、同行の大管長の息子に「マッケイ 大管長にサインしていただいてもいい ですか。」と尋ねた。 しかし、彼は父 がとても疲れていると思ったので、そ の女の子に断ろうとした。そのやり取 りをそばで聞いていた大管長は, 女の 子に向かって,冗談に尋ねた。「あなた に読めるくらいわかりやすく書けるか な」すると女の子は、大管長が本気な のかどうかわからずに, めんくらって しまった。その瞬間ひとりの同行者が 至急の用件で割って入り,数分間話が 続いた。そして大管長がサインをしよ うとして振り向いたときには、 もうそ の女の子は見えなかった。

そのときのことを息子はこう語って いる。「あのときほど父があわてたの

を私は見たことがありません。」マッケ ィ大管長は「青い服を着たあの女の子 を捜してください」と周囲の人々に言 った。「彼女のサイン帳にサインした くないという印象を与えたに違いあり ません。私の言葉を誤解したのです。 どうしてもあの子を捜してください。」 間もなく, 支部長や伝道部長たちが一 斉に青い服の小さな女の子を捜し始め た。しかし見つからなかった。ところ がひとりの宣教師が、その子がだれで あるか思い当たるところがあった。そ こでその宣教師はその夜遅く大管長に 電話を かけ、次のような 指示を受け た。「あの子にこう伝えて欲しい。サ インできなくてごめんなさい。ソルト レーク市の私のところにサイン帳を送 るよう支部長にお願いしました。サイ ンをして, 直接, あなたに送り返しま す,と。」そして、マッケイ大管長はそ の通り実行した。

人の尊厳!マッケイ大管長は、すべて生あるものは私たちの関心の的となり思慮深い保護を受けるに値すると考えていた。動物や鳥でさえそうであると、彼は考えていた。彼はよくハンツ





ビルの農場に帰って乗馬を楽しみ、そ こここを散歩した。何年も前, 農場に 盗人が入り, 大管長の鞍が盗まれた。 そこで新しい鞍を買い, 錠と鍵のかか る馬具小屋にそれをしまっておいた。 ある日マッケイ大管長の姉妹たちが, 用具を調べるために農場に立ち寄った ところ, 馬具小屋の窓がひとつ開いて いるのを見つけた。そこでまた盗人が 入らないように、その窓を閉めた。大 管長はそのことを姉妹たちから聞くと 静かに言った。「小屋の中に小鳥の巣 があるので、私がその窓を開けておい たんだよ。親鳥がひなにえさを運ぶ, ただひとつの通路なんだ。ちょうど時 間があるので見てこよう。」彼は出かけ て、その窓を開けて戻ってくるとやさ しく言った。「思った通りだったよ。 一羽の小鳥が中に入ろうとしていて, 母鳥が中から外に出ようとしていた。」

十二使徒評議員会の会員のとき,マ ッケイ長老はシーザーという名の大き な雄豚を飼っていた。ある日曜日の朝 シーザーが柵を壊した。列車の時間が 迫っていて、その柵を修理している時 間がなかったので、マッケイ長老はシ ーザーを鶏小屋に入れた。しかしその ことを息子に言うのを忘れていた。そ の晩の2時に突然電話のベルが鳴り, 家族の者は目をさました。よくない知 らせではないかと心配しながら受話器 をとると,次のような電話電報であっ た。「シーザーは鶏小屋、水たのむ」 マッケイ大管長の忍耐力、気高い品 格、および彼の仕えた救い主に対する 愛は、彼の語るすべての言葉と、すべ ての行為のうちに表われていた。しか し、彼が福音のために尽くそうと決心 した結果どのような人物になったかは

彼がただ静かに座っていて一言も話さ

なくとも、人々の目に明らかであった。次のできごとは、マッケイ大管長がヨーロッパ訪問の帰途出合った、ひとりの人の口を通して伝えられたものである。

「マッケイ大管長がヨーロッパから 帰国されたとき、私はニューヨークに いました。そのとき、何枚か写真を撮 影するようになっていました。しかし 撮影に行ける普通のカメラマンはいま せんでした。そこでユナイテッド・プ レス社はやむをえず、犯罪専門のカメ ラマンを行かせました。彼はニュヨー クで最も難しい仕事に慣れていたカメ ラマンです。ところが彼は空港に行っ て2時間もそこにいたあげく, 非常に たくさんの写真を持って暗室から出て きたのです。彼は写真を2枚だけ撮れ ばよいと言われていたのです。上司は すぐに彼をしかりつけました。『一体 どうしたというんだ。余計な時間をか けた上に, 余分な材料までたくさん浪 費して』

カメラマンは、余分の費用は喜んで自分で払うとあっさり答えたのでした。さらに彼がかけた余分の時間には当する額を給料から差し引いてものときで言いました。彼がそのときのでする数なならぬ価値とについては並みならぬ価値間あいてととは彼を部屋に呼んで、何が専門は大きなを記した。そとで犯罪専門小なとは後を部とした。そとで犯罪専門小なとは答えました。それでいつも私は、神の予ええては実際どのような人だろうかと考えてきました。ところが、きょう私は予言者に会ったのです。』」

デビド・**O**・マッケイは、すべての 人々の長所を見つけ、人々を愛する予 言者であった。

デビド・〇・マッケイの略歴

(1873 - 1970)

	年齢	
1873年9月8日	_	ユタ州ハンツビルで出生
1897	24	ユタ大学卒業,級長と卒業生総代をつとめる
1899	26	ウィーバー・アカデミーの職員となる
1901	27	エマ・レイ・リッグズと結婚
1906	32	使徒に聖任される日曜学校第二副会長になる
1917	44	「古代の使徒」を著わす
1918—34	45-61	日曜学校中央管理会長
1919—21	46-48	教会教育委員長
1920 - 21	47—48	全世界の伝道部を訪問
1922-24	49 - 51	ヨーロッパ伝道部長
1934—51	61 - 78	大管長会第二副管長
1951	78	大管長に支持される
1955	82	スイス神殿を献堂
1956	83	ロスアンゼルス神殿を献堂
1958	85	ニュージーランド神殿を献堂,ニュージランド・チャー
		チカレッジを献納,ロンドン神殿を献堂,ハワイチャー
		チカレッジを献納
1961	88	教会相互調整プログラムの着手
1964	91	オークランド神殿を献堂
1970年1月18	日 96	死亡

「とうとう起こってしまった。彼女がずうっとあり得ないと考えてきたこと,自分には絶対に起こりっこないと言ってきたこと,自分よりも弱い人間だけに起こると思ってきたことが,彼女にも起こった。彼女は非教会員と恋をしてしまった。」この聖徒の道にあった物語を読んだとき,私の心は深い後悔の念で一杯になりました。というよりもすでに遅く,私はその淵からはい上がる気力もなく,ただ時の流れに身を任せるだけでした。

一昨年の4月、地方部大会の夜に私は小さな夢を見ました。だれかが静かにしかしはっきりした声で、たったひとこと「すべて神のみこころです」と言っているのです。私はそのひとことで目が覚めました。目が覚めたといってもはっきり覚えてはいず、ただその言葉が頭の中で山びこのように響いているのです。何がみこころなのかそのときの私にはわかりませんでした。でもこれが私の心にやすらぎを与えてくれたのです。

すべてが神のみこころとはいっても自分のまいた種は 自分で刈り取らなければいけないことに気づき,この言葉が天のお父様の励ましと慰めであると思って,とにか く今を精一杯生きようと決心しました。もちろんこの決 心には自分が好意を寄せている人に教会のことを教えよ うということが含まれていました。しかし神を全く信じ ようとしない人に,神の福音をどのようにして伝えたら よいものか思案するばかり。私の心はまた冷えていきま した。そして辛い1ヵ月が過ぎ,その人への愛が強くな した。ひざまずき、自分の愚かさと弱さを心から悔い改め、兄弟がパプテスマを受けられるように、そのことだけを熱心に祈り続けました。涙がとめどなく頰をぬらし罪が洗い清められたような気がしました。兄弟が家庭集会を受けてくれたことだけでも私にとっては大きな祝福でした。

werk and

主は私の思いよりさらに深く私を、そして兄弟を愛してくださいました。兄弟がバプテスマを受けるということを聞いたのはそれから1週間後のことです。すぐには宣教師の言葉を信じることができず、驚きとうれしさの入り混じった妙な気持でした。7月18日、兄弟はバプテスマを受け、主の道に入りました。私の前で神を冒瀆し私の信仰をあざけった人が主の力により新しく生まれ変わり、そして8月の証会では伝道に出たいと証したのです。

3カ月前に見た夢の中でのひとこと「すべて神のみこころです」。この言葉の意味が最近になってようやく理解できるようになりました。私が兄弟を真理へ導くためには、何にもまして私自身が「神の王国と義」を求め、主に近づかなければならなかったのです。常に主に従い福音を実践しているなら、主は求めない先から私たちが必要としているものをご存知で、みこころにそったときに祈りを聞き届けてくださったのです。

その後は感謝することばかりです。兄弟は常に主に忠実な僕であり、私の模範であり、証でした。あれほどの

愛とは その人を救いに導くことなのです

山形支部 山田道子



ればなるほど教会との板ばさみで苦しい日々を過ごしました。でも小さいながらも証がありましたから、この福音をどうしても伝えなければならないと再び決心して彼のところへ行きました。しかしふたりの間には気まずい空気が流れただけでした。私と同様彼も苦しんでいたのでしょう。いいえ、私よりもずっと真剣に悩んでいたのかもしれません。

「もし私を愛してくださるなら家庭集会を受けてください」と頼んだとき、ようやく私の心に光がさしてきました。返事はすぐにもらえませんでしたが、彼から承諾の電話を受け、事態が急変したことを心から主に感謝しました。そして7月の上旬だったと思います。私はみたまに導かれ、ただひたすら兄弟のために祈りをささげま

懐疑主義の人が今はこの悔改めの福音を迷える小羊たちに宣べ伝えているのです。私は時々主を知る前の兄弟の姿を思い浮かべては主の偉大な愛といつくしみを感じないではおれません。私の信仰は兄弟が伝道に出たことによりなお一層強められ、この末日聖徒イエス・キリスト教会が神の唯一真の教会であるとの確信を得ることができました。神と一致し、みたまに従うことこそが兄弟への愛であり、それがふたりの永遠の生命に至る備えであることがわかったのです。

愛とはその人を救いに導くことなのです。このイエス・キリストの福音を分ち合い、実践することが最も重大な愛の表現なのです。そして天のお父様が私たちを愛してくださっていることを心から感謝致します。アーメン。





奇跡の伝道者

スペンサー・W・キンボール長老御夫妻来日

キンボール長老御夫妻は、3月3日 (土)早朝、元気なお姿で羽田に到着された。出迎えた大勢の会員ひとりびとりとにこやかに握手され、会員から贈られたバラの花を胸に、写真にお入りになられた。

同日夕方よりの指導者会では、リー 大管長のメッセージである堅固な家庭 のフィルムを紹介され、主が今一番関 心を向けておられることについてお話 になり、翌4日の東京ステーキ部大会 では伝道の召しについて大きなチャレ ンジと祝福を与えられた。

キンボール長老のお話より



羽田に出迎えた会員達に囲まれて

『リー大管長と私は30年のつきあいです。私は彼のほんとうに良い友達になり、飾らないつおきあいをさせていただいております。

ニューヨークで声帯を手術するとき もその決定を下す場にい合わせてくれ た兄弟のひとりです。リー大管長は医 師に私がどうしても声の必要な立場にいる人間だということを話してくれました。すると医師は言いました。「生きるためには声帯を取ってしまわなければなりません。」

声は私の命です。私の責任は全世界 の教会をめぐり歩いてこの教えを語る ことなんです。私の声を取ってしまう ということは私の命を取ってしまうと 同じことです。

それで、声が出るように片方を残し、 ガンになっているところを全部取って しまいました。私はこの長い年月の間 このような状態で良く話すことができ ませんが、このように大勢の人々にお 話できるさまざまな機会を与えられて おります。リー大管長がそのときの手 術の立合人として祝福してくださり、 声帯を取るかいなかについて決定を下 すのを助けてくださったことに感謝し ております。

2年前にまた同じガンが喉にできて しまいました。リー大管長は前と同じ ようにその場にい合わせて、声帯を取 ってしまうか、そのまま放っておくか 決定するのを助けてくださいました。 そしてそのお祈りの結果私たちは手術 をしないと決めました。なぜなら片方 しか残っていなかったからです。それ を取ってしまえば声が全然出なくなっ てしまうからです。ですから、コバルト療法でガンを焼き殺してしまうように決めたのです。そしてこの治療と彼の灌油の儀式によってガンの部分が完全に取り去られたのです。

そしてまた大きな決定を下さなければならないときがきました。この心臓もおかしくなっているので手術をしなければ 2, 3ヵ月しか生きられないとのことです。そしてリー大管長のもとにまた行きました。タナー副管長もそこにおりました。

これは私にとってほんとうに恐ろし いことです。若い人々にとって心臓手 術は可能なことかもしれません。しか し77歳の老人の成功例はほとんどない のです。手術をしてもその途中に死ん でしまうという結論でありました。し かし私たちは, 医師が弁を取り換える 手術を施す間, 主が私たちを祝福して くださることを確信し, 手術を受ける ことにしました。今, 私はここに生き ております。それからまだ1年たって おりませんが, 以来私はこのように教 会の大会でお話する機会を与えられて おります。主は私をほんとうに祝福し てくださいます。この私の人生の艱難 辛苦の最中、いつも友として私のそば にいてくださったリー大管長に感謝し ています。』

キンボール長老は11歳のとき祝福師の祝福を受けたが、その中には多くの国の人々に福音を語る責任があることを宣言されていた。まさにその言葉どおり、重なる大手術にもめげず各国を回り、その責任を果たしておられる。また、リー大管長とは特に親しい間柄である。

『リー大管長が神の予言者であると 申し上げます。彼の両肩に神の絶対的 な加護があることを証いたします。ま ちがいを犯さないためには、神の加護 を受けている予言者の勧告に従わなけ ればなりません。主は教会を導くため この器であるリー大管長をずっと以前 から準備しておられたのです。それに マッケイ大管長、スミス大管長、リー 大管長が家庭を堅固にするという勧告 を語るとき、彼らは主に導かれてそう 語っているのです。

私たちは、人間にとって今最も重大だと思われる、家庭を堅固にするというプログラムに満場一致で参加している唯一の民だと思います。主が今望んでおられることは、リー大管長が言わ



伝道資金を貯めるようチャレンジを受ける少年達

れたように、家庭のきずなを堅固にすることです。主はこのことだけに関心をお向けになっているのです。主は教義と聖約の中で、両親は子供たちが「主の前に正しく歩むこと」を教えなければならないと戒めておられます。これはこのようにした方が良いのでは?という単なる提案ではありません。これは命令です。ですから、ここにいらっしゃるひとりびとりが、月曜日に家庭の夕べを開くように、戒めとして、勧告として言い渡します。』

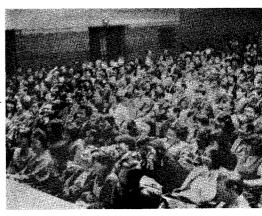
「潮の流れと風の方向はときどき違うことがあります。海面を吹く強い風は氷山を北へ流そうとしますが、底を流れる水は風がどんなに強くともそれを南の方向へ流してしまうのです。」現代の退廃した世にあって堅固な家庭がどんなに大きな力となり得るか、キンボール長老は、それを大海の潮にたとえて話された。

4日(日)の一般大会では12歳から14歳の少年を演壇に招き、19歳になったら宣教師になるよう、各々に300円ずつプレゼントして、預金通帳を作り伝道資金をためるように戒められた。少年たちにとってはすばらしい思い出となることであろう。加えて、成人会員にもチャレンジを与えられた。

『若い兄弟たちは自分の必要なものやモデルの飛行機を買いたいと思うときがあるでしょうが、それをまっすぐ預金に向けてください。それは御両親も犠牲を払うことを意味しているので

す。全部の若い少年が伝道に行くべきだということです。男の子が生まれたら、すぐ銀行に行って預金口座を作ってください。世界各国の大きな都市にたくさんの日本人がいます。サンパウロには、日本語しか話せない日本人が6万人もいます。みなさん日本の方であってもギリシャやデンマークあるいは南米に宣教師として、彼らの言葉を覚えて伝道することができるのです。また日本での伝道は日本人の手で行なうべきだと思います。

兄弟姉妹のみなさん、犠牲は天の恵みをあなた方にもたらすことと思います。私たちは、主がそうせよと望んでおられることを行なうために、自分のしたいことを忘れたはずです。2人から4人もの子供を同時に伝道に出しているモルモン家庭がたくさんあります。そのために牛や農場や家までも手



キンボール長老のお話を聞く会員達

離さなければならない人もいます。で すからいったん教会員となったら、す べての時間、財産、エネルギーを、主 の教会の良い目的のために使おうでは ありませんか。』



主の召しに応える福岡支部の神権者たち

ホーム•ティーチャー の喜び

福岡支部

「教師の義務は常に教会員を守護し、彼らと共にありて彼らを強くすべきものとす。」(教義と聖約20:53)ホーム・ティーチングを通してこの主からの召しを実行する福岡支部の神権者たちは大きな祝福を受けています。

ここにひとりのホーム・ティーチャーの証を紹介しましょう。

『私たちの担当家族の中に安息日に 働かなければならない姉妹がいらっし ゃいました。私たちが話すことはいつ も安息日についてでした。なぜ安息日 があるのか, 安息日を守らなければど うなるのか。でも会うたび話すたびに 姉妹の心と私たちの心とがだんだん離 れていくのがわかりました。ある日の ホーム・ティーチィングの帰り道、私 たちは失望のあまり, 自分たちが姉妹 にふさわしくないのではないか,私た ちと話すことによって姉妹の心が神様 から離れていくのではないかとすら考 えました。「担当を代えてもらおう。」 そんな思いが私たちの心を通り過ぎて いきました。そんなとき,ひとつの聖 句を思い出しました。「それであるか ら私の愛する兄弟らよ、あなたたちは 神が餌子!ニス・キリストに真に従う 者たちに一人のこうず与えたもう、こ の愛で自分たちの資を満たすためにあ りったけのこをつくして年父に祈れ。」 (モロナイ7:48)

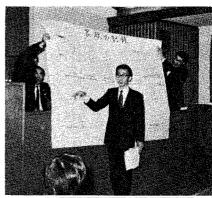
私たちはもう一度姉妹とホーム・テ ィーチングをするために心がひとつに なるように、神様の仕事をする喜びで いっぱいになるように、そして姉妹が 安息日を守ることがどんなに大切であ るか自分自身でわかるように, つぎの 安息日に断食して祈ることにしまし た。それから主が私たちの祈りを聞い てくださるように、私たちに与えられ た時を大切に 過ごそうと 決心 しまし た。そうして祈ったとき、私たちは何 度も 何度も 心に 熱いものを 感じまし た。それから間もないある安息日に, 私たちは 姉妹 に 会うことが できまし た。姉妹が安息日に教会にいらっしゃ ったのです。そしてこのようにおっし ゃいました。「私は夢を見ました。そ れは自動車が衝突したりビルが倒れた り、あちこち火事が起こる夢でした。」 しかし本当に怖かったのは私たちでし た。私たちは主がこのようなことをな さることを信じて祈ったでしょうか。 私たちはただ自分の心を勇気づけるた めに 祈ったのでは なかった でしょう か。信仰の弱さを悔い改めながらもこ のような経験を主に感謝し、主が私た ちをほんとうに愛してくださっている ことがわかりました。そして今, ホー ムティー・チャーとして働く喜びを感 じています。』

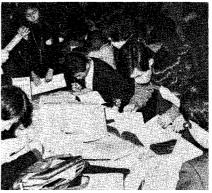
第1回系図祭開かれる

大阪ステーキ部

1月15日(成人の日),大阪ワード 部において,ステーキ部主催の系図祭 が開かれました。この会では,系図に 関する多教の参考資料と記入模範シー トが展示され,またステーキ部系図役 員の指導による作成実習が行なわれま した。

特に支部所属の兄弟姉妹の熱意には 目を見張るものがあり、今後の成果が 期待されます。また同時に、これまで





にも増してひとりびとりの系図に対する証の強さが感じられました。今回の会で高まった系図への関心をより一層強くし、生者と死者の救いの努力が続けられることでしょう。

金沢支部鍬入れ式

(1月)

北陸地方部の発展は金沢支部の建築にかかっているという会員たちの熱心さが遂に実を結び、1973年1月の北陸地方部大会のときに 鍬入れ式となった。若き末日聖徒の青年がひとりでも多く金沢支部の建築に出かけることを祈るものである。



